16　院内各部署の業務実績

院内各所属一覧（掲載ページ）

	ページ	所　属
診療部	48	内科統括
	50	糖尿病・内分泌・血液内科
	51	呼吸器内科
	52	消化器内科
	54	腎臓内科
	56	神経内科
	58	精神神経科
	59	循環器内科
	61	心臓血管外科
	62	小児科
	64	外科
	66	整形外科
	67	形成外科
	68	脳神経外科
	70	皮膚科
	71	泌尿器科
	72	産婦人科
	74	眼科
	76	耳鼻咽喉科
	77	放射線科
	79	麻酔科
	80	病理診断科
	81	歯科口腔外科
	82	手術管理科
	83	非常勤医師・臨床研修医
診療技術部	84	臨床検査科
	86	中央放射線科
	88	臨床工学科
	90	リハビリテーション科
	92	栄養科
	94	医療技術科
	97	薬剤科

	ページ	所　属
看護部	99	看護部長室
	104	外来
	105	在宅療養支援グループ
	106	手術室
	107	中央材料室
	108	ＩＣＵ（集中治療室）
	109	３Ｂ病棟
	110	４Ａ病棟
	111	４Ｂ病棟
	113	５Ａ病棟
	114	５Ｂ病棟
	115	６Ａ病棟
	116	６Ｂ病棟
	117	７Ａ病棟
	118	７Ｂ病棟
	119	３Ｃ病棟
事務部	120	病院経営課
	122	病院総務課
	123	医事課
	125	医療安全対策室
	127	感染対策室

■内科統括

1　診療体制

消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科などの内科系診療科がそれぞれ高い専門性を発揮すると同時に、相互に協力しながら内科全般の多様な疾患に対応する診療体制をとった。

2　平成 28 年度の診療実績

（1）診療体制の充実

・消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科領域における専門的な診療を行った。

＊糖尿病・内分泌内科と血液内科は代謝一般内科として診療していたが、名称を糖尿病・内分泌・血液内科に変更

＊腎内科の名称を腎臓内科に変更

・リウマチ・膠原病内科非常勤医師による診療を継続した（毎週火曜日）。

・このほか内科系診療科が分担して下記診療を行った。

救急外来当番（平日午前９時～午後５時）：これまでと同様平日午前、午後各１名が救急外来の診療を担当した。

・当直・副直（休日と平日の午後５時～翌午前９時）：これまでと同様当直医１名、副直医１名とし、副直医は昨年度に引き続き平日は午後５時から午後９時まで、休日は午前９時から午後９時まで病院にとどまり診療にあたった。

・初診外来（平日午前）：平成 25 年４月より２名体制としている

（2）内科の医局会とカンファレンス

・内科医局会（毎週火曜日午後５時 15 分から午後６時 30 分）：薬剤の適正使用等に関する勉強会、連絡事項の伝達、懸案事項の打ち合わせ、症例検討を行った。

・早朝カンファレンス：水曜午前８時から勉強会を行い、後期レジデント、初期臨床研修医を中心に診療知識向上に努めた。

・夕(方)カンファレンス：毎週月曜日の午後、主に薬剤の適正使用等に関する勉強会は今年度より中止し、内科系診療科ごとに適宜勉強会を行うこととした。

3　新・専門医制度への対応

平成 29 年度からの制度開始に向け、日本内科学会に対し基幹施設として専門研修プログラム「富士市立中央病院内科専門研修プログラム」を申請した。同時に東京慈恵会医科大学附属病院「東京慈恵会医科大学附属病院内科専攻医研修プログラム」、静岡県立総合病院「静岡県立総合病院内科専門研修プログラム」、国際医療福祉大学熱海病院「国際医療福祉大学熱海病院内科専門研修プログラム」に連携施設

として参画するよう申請した。

4　来年度の課題

（1）内科疾患全般の診療の要請に応えながら、より専門的で高度な医療を提供できる体制を維持する。

①すべての専門領域において適切な医療が提供できるよう、さらに体制を整備する。

②行政、医師会との連携により、地域に専門性の高い医療が提供できる環境・体制を整備する。

（2）研修体制の整備

新・専門医制度に対応する研修体制を整備する。

（3）高齢化に向けて、高齢者医療の体制整備を行う。

（文責　笠井　健司）

■糖尿病・内分泌・血液内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	藤井　常宏	部長	石澤　将
副部長	山城　秀樹	医長	瀧　謙太郎
医員	伊藤　勇太	専任医師	大村　有加
専任医師	本澤　訓聖		

2　平成 28 年度の診療実績

（１）外来診察（専門）

藤井医師（悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、自己免疫性血小板減少性紫斑病、多発性骨髄腫、急性・慢性白血病等）、石澤医師（糖尿病、内分泌疾患等）、山城医師（糖尿病、一般疾患）、瀧医師（糖尿病、妊娠糖尿病、内分泌疾患）

（２）地域連携室経由での紹介外来患者総数

藤井医師 218 名、石澤医師 140 名、瀧医師 137 名、山城医師 36 名

（３）主な患者統計（新規患者数）

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
糖尿病	542	505	642
悪性リンパ腫	67	48	73
特発性血小板減少性紫斑病	50	49	47
骨髄異形成症候群	35	35	15
多発性骨髄腫	11	20	15

3　来年度の課題

（１）外来受診患者への対応

外来患者が多く、開業医からの紹介患者が増加している。富士市在住の患者が当院に集中している現状を踏まえ、病診連携ネットワークの構築に努める。市役所の職員とも相談しながら、病診連携を行っていく上での問題点を抽出し改善していく。

（２）入院患者への対応

平成 29 年度に新たな病棟医を３名迎え、新しい体制で診療を開始する予定である。当院への糖尿病の紹介患者は、健康診断や症状自覚を契機として近隣の診療所を受診し重度の糖尿病を指摘されるケースが特に多く、初めて糖尿病の診療を開始する方々となる。初期の段階で診断すること、合併症が進行することの重大性、患者自身の病気の理解が重要であり、チーム医療を充実させるとともに富士市全体の病気への関心を高める工夫が必要である。

（文責　辻野　大助）

■呼吸器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	木村　哲夫	医長	小林　賢司
専任医師	佐々木　諒子		

2　平成 28 年度の診療実績

呼吸器内科は、一般的な肺炎から当地域に多い気管支喘息・慢性気管支炎・肺気腫といった慢性呼吸器疾患や、肺結核・肺非結核性抗酸菌症・気管支拡張症・肺がん等の診断及び治療を行っている。

気管支拡張症等による喀血に対しては、放射線科に依頼して気管支動脈塞栓術で止血処置を行っている。

また、慢性気管支炎・肺気腫・間質性肺炎等で、慢性呼吸不全状態にある患者に対しては、在宅酸素療法（HOT：Home Oxygen Therapy）を導入し、家庭での酸素投与を可能とし、生活の質の向上を図っている。

肺がんに関しては、気管支内視鏡で診断し、治療は主に静岡県立静岡がんセンター（駿東郡長泉町）と連携し、総合的な治療を目指している。

当院は静岡県東部地区で唯一結核病棟（10 床）を有しており、近年再び増加しつつある結核に対しても治療を行っている。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
気管支内視鏡検査	64	44	49

3　来年度の課題

平成 29 年度も常勤医師３名による診療体制が継続可能となるため、引き続き安定した診療を行うことによって、地域医療に貢献する所存である。

（文責　木村　哲夫）

■消化器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	鳥巣　勇一	副部長	中野　真範（～１月）
医長	伊藤　公博（２月～）	医員	庄司　亮
専任医師	秋田　義博	専任医師	遠藤　大輔
専任医師	木下　勇次		

2　平成 28 年度の診療実績

平成 25 年度の９年ぶりの診療再開から４年目を迎えた。平成 28 年度も消化器内科は東京慈恵会医科大学消化器・肝臓内科および内視鏡科から派遣された６人の常勤医師および３人の非常勤医師で診療にあたった。

主に７Ｂ病棟で入院を受け入れ入院診療にあたった。病棟内のエコー室で肝生検やラジオ波焼灼術等を行った。

消化器内科専門外来は月～金曜日の全ての外来診察日で行い、内視鏡診療に関しても定時枠を設置し全ての外来診察日に行った。

夜間･休日の消化管出血に対する緊急内視鏡的止血術は、消化器内科医師が当直もしくは副直の際は当科で担当した。その他の日は外科に担当していただいた。肝生検やラジオ波焼灼術等については７Ｂ病棟のエコー室で行った。

平成 28 年度の検査・治療件数は緊急止血術、各種 ESD、大腸ポリペクトミーをはじめ胆道内視鏡や経皮的ドレナージなど胆膵領域の処置が増加した。

Ｃ型慢性肝炎に対するインターフェロンフリー抗ウイルス剤治療導入

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
DCV/ASV	64	24	2
SOF/RBV		43	21
LDV/RBV		50	16
OBV/PTV/r		1	8

内視鏡治療

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
内視鏡的止血術	127	152	107
食道 ESD	1	7	4
胃 ESD	23	31	31
胃 EMR	8	4	7
十二指腸 EMR	4	1	-
大腸 ESD	10	12	14
大腸ポリペクトミー／EMR	187	217	235

胆膵検査・治療

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
ERCP	248	318	289
EBD	137	174	141
EST	83	112	105
EPBD	7	2	10
EPLBD	-	7	-

経皮的ドレナージ

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
PTCD	10	8	6
PTGBD	55	62	93
PTGBA	-	15	-
PTAD	12	11	6
肝のう胞ドレナージ	2	1	2

肝癌治療

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
RFA	36 症例 ／9session	35session	34session
PEIT	1 症例 ／1 session	2 症例 ／2 結節	-
TACE or TAI	41 症例 ／3session	51session	58session

3　来年度の課題

診療再開後、当科で診断および治療を受けた患者さんについては疾患別、治療別にデーターベースを作ってきた。4 年分のデータをもとに様々な解析を行うことにより臨床へフィードバックしたい。また、今後は新たに臨床研究を開始する予定であり、当院から研究会や学会などで新たな情報を発信していきたい。

（文責　佐伯　千里）

■腎臓内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	笠井　健司	副部長	高橋　康人
医長	山本　和佳	専任医師	高村　毅
専任医師	小松嵜　陽		

2　平成 28 年度の診療実績

平成 25 年４月に発足した富士市 CKD（慢性腎臓病）ネットワークが順調に機能し、腎臓病の円滑な医療連携が行われた。腎臓病に対して早期より治療介入できるようになったほか、二人主治医制（患者さん一人にかかりつけ医と専門医が連携し、継続的に医療を提供するしくみ）による診療も定着している。

慢性透析導入患者数は増加傾向にあり、高齢化を背景に血液透析が選択されることが多いが、今年度は壮年世代に腹膜透析が選択された。さらに、富士市透析防災ネットワークにより市内７透析施設相互の災害時協力体制が強化されると同時に、透析の医療連携も円滑に行われた。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
血液透析施行患者数	266	282	295
血液透析施行回数	2,603	2,564	2,776
腹膜透析患者数（年度末）	17	15	17

慢性透析導入患者数	67	84	97
血液透析／腹膜透析	64/3	83/1	94/3

急性血液浄化施行患者数	47	43	64
持続血液濾過透析	25	33	48
エンドトキシン吸着	8	1	4
血漿交換	7	3	3
二重濾過血漿交換	3	3	6
血液吸着	0	0	1
白血球除去療法	1	3	2

＊急性血液浄化療法施行件数に関しては各科管理の症例を含む

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
手術件数	98	90	90
血液透析アクセス	89	83	85
腹膜透析アクセス	9	7	5

腎生検	41	37	37

腎臓病教室	12	12	12

CKD 紹介（透析を除く）	230	238	218

３　来年度の課題

（１）腎臓病を早期に診断・治療できる体制を整える。

①カンファレンス、回診などを通じてスタッフ全員で検討を重ね、患者ひとり一人にきめ細かい適切な医療が提供できるよう努める。

②複雑な病態にも適切に対応できるよう知識・情報の共有に努め、他診療科との連携を維持する。

（２）地域の腎臓病診療体制を整備する。

①病院、診療所から紹介いただきやすい環境をつくる。

②二人主治医制による診療を通して腎臓病診療が地域に定着するよう努める。

③高齢者、独居など社会的要因で医療継続に困難をきたす患者への対応力を高める。

（３）市民への啓発活動を継続する。

①富士市 CKD ネットワークなどを通じて、行政、医師会と協力し、腎臓病の予防、治療にかかわる知識の普及に努める。

（文責　笠井　健司）

■神経内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	河野　優		

2　平成 28 年度の診療実績

平成 28 年度は部長と１人の非常勤医師とで外来診療を行った。

外来は、火曜日を除く月から金曜日の週４回、主に紹介制を取り、物忘れ、しびれ、歩行障害など様々な神経症状を主訴とする患者の診断、治療および経過観察を行った。

入院を要する疾患も多く、内科各科からの協力を仰ぎ、内科主治医制、神経内科常勤医が担当医として治療にあたった。病院統計では内科入院患者として統計を取っている。

また、平成 28 年度から日本神経学会・准教育施設の認定を受け、専門医教育施設として活動することが可能となった。

（１）疾患別入院患者数　　（人）

		平成26年度	平成27年度	平成28年度
血管障害	脳梗塞／脊髄梗塞	85	101	74
	脳出血	1	1	1
	一過性脳虚血発作	4	3	3
感染・炎症性疾患	脳炎／脳症	7	7	6
	プリオン病	2	1	2
	髄膜炎	4	3	10
変性疾患	認知症	1	2	1
	パーキンソン病関連疾患	14	22	7
	脊髄小脳変性症	2	0	1
	運動ニューロン病	1	9	9
脱髄性疾患	多発性硬化症／視神経脊髄炎	17	7	11
末梢神経障害	ギランバレー症候群	4	3	5
	慢性炎症性脱髄性多発神経炎	8	2	0
筋疾患	筋炎	4	3	0
	重症筋無力症	5	1	1
発作性疾患	てんかん／痙攣発作	39	21	20
その他		27	22	31
計		225	208	182

（２）特殊検査実績　　（件）

	脳波	針筋電図	神経伝導検査
外来	109	15	159
入院	106	5	11

（３）臨床調査個人票作成

神経疾患の多くは難病として特定疾患治療研究事業の対象となっており、臨床調査個人病の作成総数は新規・更新を併せて 214 件であった。

３　来年度の課題

（１）常勤医の増員

（２）内科入院主治医との連携徹底

（３）神経診療の啓発、教育

（４）富士市難病団体連絡協議会との交流

（文責　河野　優）

■精神神経科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	外岡　雄二		

2　平成 28 年度の診療実績

平成 27 年度４月より、外来診療を再開している。

（１）外来診察：週４日（午前・午後）　※金曜日は非常勤医師が診療（午前のみ）

対象疾患

統合失調症、気分障害（うつ病・躁うつ病他）、神経症（強迫性障害・全般性不安障害・社交不安障害他）、認知症（アルツハイマー型認知症・脳血管性認知症他）、精神遅滞、てんかん、アルコール依存症、症状精神病　など

（２）入院患者診察：毎日

対象疾患

当院で入院治療中の精神疾患患者の病状管理、認知症患者のせん妄症状のコントロール、自殺企図後の患者の精神症状のフォロー、アルコール依存症の離脱症状の治療、各種精神症状（不眠･不安･抑うつ･希死念慮）の治療 など

（３）外来の診療統計総計：2,524 名

月別診療数　（人）

年度＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
28	188	174	203	196	215	218	214	221	222	214	206	253
27	52	90	108	132	146	140	151	154	163	177	181	207

3　来年度の課題

当院には精神科の入院病床がないため、入院治療が必要な精神疾患患者の治療については対応ができない。また、常勤医師が１名であるため、夜間･休日での診療・対応が困難である。市内の精神病院との連携をより密にして、対応困難な患者の入院治療への対処をスムーズに行えるようにしていく方針である。

（文責　外岡　雄二）

■循環器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	三川　秀文	部長	阪本　宏志
副部長	銭谷　大	医長	山田　崇之
医長	木下　浩司	専任医師	野村　充希

2　平成 28 年度の診療実績

富士地区の循環器疾患の救急医療に対して、心臓血管外科と協力し 365 日体制で当直を配し、看護師、放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師と共にチーム医療で日夜取り組んでいる。今年度は急性冠症候群に対し緊急冠動脈造影検査を 189 例に施行し、内 140 例に対して経皮的冠動脈インターベンションを施行している。また、心肺停止や心原性ショック例に対しても経皮的心肺補助法（PCPS）や大動脈バルーンパンピング法（IABP）などの機械的補助装置を用いて積極的に救命に努力している。

外来診療では多列型Ｘ線 CT 装置(MDCT：256 スライス）および核医学検査などで冠動脈疾患の診断が低侵襲での診断が可能である。多枝病変を有する症例も多く、血管内超音波法（IVUS)、光干渉断層法（OCT)、冠血流予備量比（FFR）等の画像診断を用いて、病変の形態や組織性状の把握、虚血の有無等を評価し、治療に取り組んでいる。

末梢動脈疾患の治療も積極的に行い、総腸骨動脈、大腿動脈、膝窩動脈以下など 46 例にバルーン拡張やステントを用いた血行再建術を施行した。

日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本心血管インターベンション治療学会研修施設に認定されており、循環器専門医４名、日本心血管インターベンション治療学会認定医２名、専門医・指導医１名を有し、学会発表も積極的に行っている。教育面では他施設から医師を招き、知識および技術の向上に努めている。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
冠動脈造影	1,034	961	1,033
冠動脈インターベンション例	411	375	399
緊急症例（治療）	164（129）	170（132）	189（142）
末梢動脈疾患（腎動脈疾患）	46（3）	29（3）	46（0）
ペースメーカー植え込み術	58	52	53

３　来年度の課題

循環器内科では薬剤難治性心不全（基礎疾患は陳旧性心筋梗塞、弁膜症、心房細動、拡張型心筋症等）で入退院を繰り返す症例が増加してきた。不整脈の治療としてのアブレーション、植込み型徐細動器（ICD）と伴に難治性心不全治療の心臓再同期療法（CRT）等を実施することで、循環器領域で、より積極的な治療が期待できるため、医師の増員、特に不整脈班の医師の派遣を働きかけていきたいと思っている。

（文責　阪本　宏志）

■心臓血管外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	織井　恒安		

2　平成 28 年度の診療実績

当院の心臓血管外科は平成５年４月の開設以来、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、弁膜症、不整脈手術、大動脈疾患（胸部から腹部）、末梢血管疾患（慢性閉塞性動脈硬化症、急性動脈閉塞症）に代表される成人疾患を一貫して扱っている。

現在は、指導教授を含めた東京慈恵会医科大学からの派遣医師３名と非常勤医師１名の計５名体制で日々の診療を行っている。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
先天性心疾患	1	0	0
虚血性心疾患	6	10	12
弁膜症	13	17	24
不整脈	4	2	3
胸腹部大動脈	0	0	2
胸部大動脈	3	2	4
腹部大動脈	9	8	11
末梢血管	19	19	27
心臓腫瘍、他	1	1	2
計（重複症例あり）	56	59	85

3　来年度の課題

以前当科では、急性大動脈解離や動脈瘤破裂等に対する緊急手術を数多く行っていたが、心臓血管外科常勤医師の減少などの理由により、平成 22 年以降は緊急症例の対応に課題を残していた。しかし最近は、心臓手術周術期管理に携わる全てのスタッフ（循環器内科医、麻酔科医、ICU・手術室・病棟看護師、薬剤師、臨床工学技士、ハビリテーション科および心臓外科医）との合同カンファレンスを毎週（手術前週の木曜日）行い、看護・リハビリから疾患・術式に至るまでのあらゆる情報をスタッフ全員で共有することにより、大動脈解離等の緊急手術症例への対応も可能となっている。今後は、心臓血管外科常勤医師の確保により、多くの緊急手術にも対応できる体制を整え、更には血管内治療（ステントグラフト）実施施設の取得に努めたい。

（文責　織井　恒安）

■小児科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
嘱託診療参事	千葉　博胤	副部長	秋山　直枝
医長	日馬　由貴	医長	木下　美沙子
医員	鈴木　貴之	医員	鈴木　亮平（９月～）
専任医師	伊藤　研	専任医師	古河　賢太郎
専任医師	角皆　季樹（～８月）	専任医師	千葉　浩介（～11 月）
専任医師	村木　國夫（12 月～）		

2　平成 28 年度の診療実績

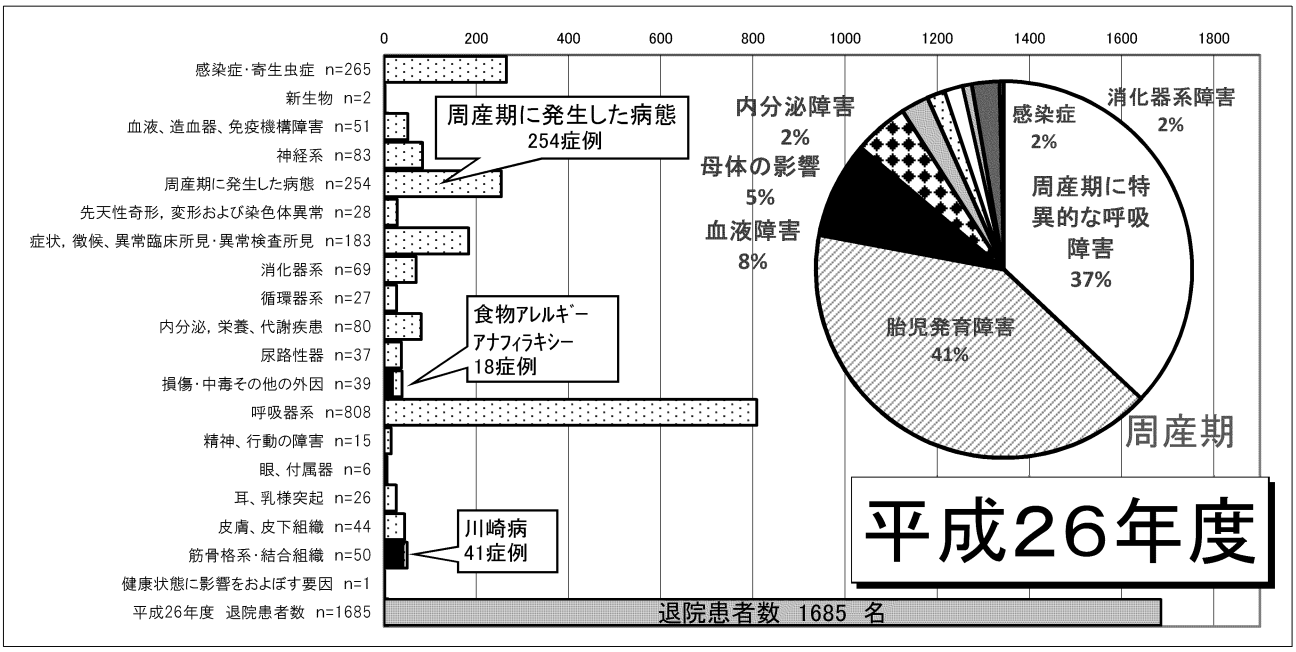
当科は一般小児科診療、小児救急、新生児医療を富士市のみならず静岡県東部地域の基幹病院として、地域で開業されている先生方、一次救急医療機関である富士市救急医療センターと連携し、24時間体制で小児患者の受け入れを行っている。また、平成26年７月に認可されたNICU（新生児特定集中治療室）を持ち、未熟児や重症新生児の受け入れ先として、質の高い医療を提供するよう心掛けている。小児医療の更なるレベルアップを目指し、週１回の重症患者への対応シミュレーション、病棟での勉強会を頻回に行うとともに、高度医療施設である静岡県立こども病院とも連携し、東部地域の小児に対し良質な医療の提供に貢献できるよう、日々研鑽を重ねている。

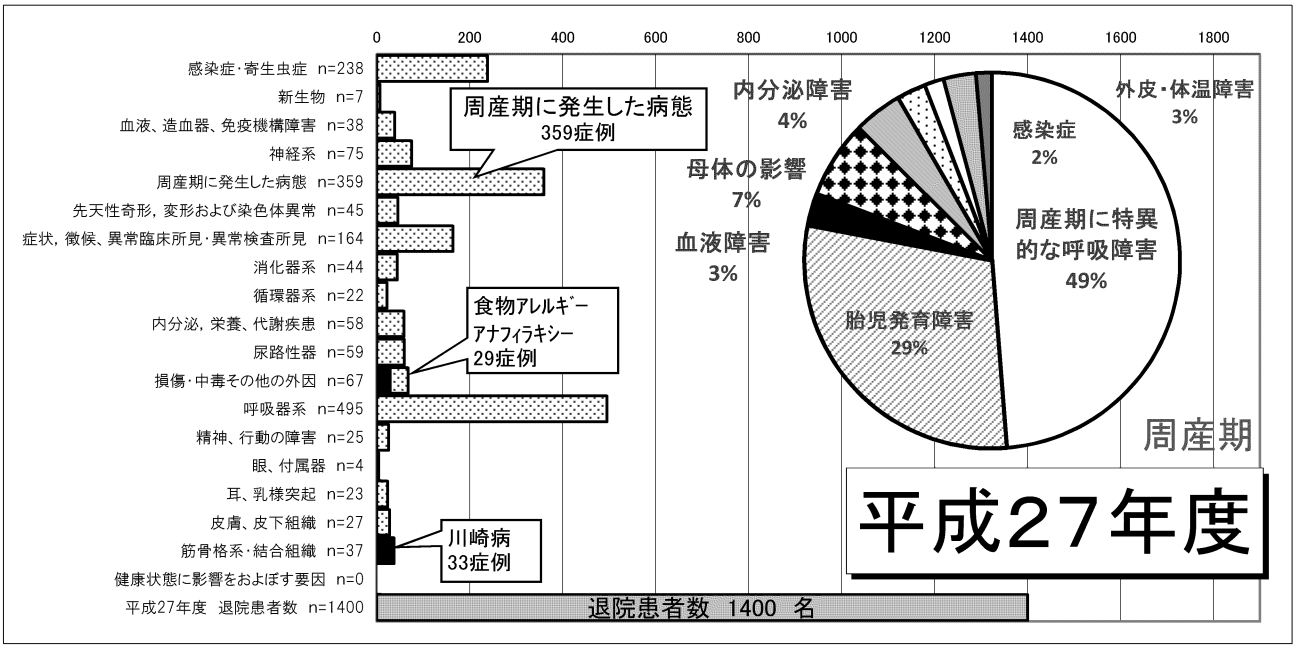
平成 28 年９月から東京慈恵会医科大学５～６年目生の診療参加型診療実習（クリニカルクラークシップ：C.C.）の受け入れを行っている。また、学会発表や医療雑誌への論文投稿など、医療全体への貢献も積極的に行っている。

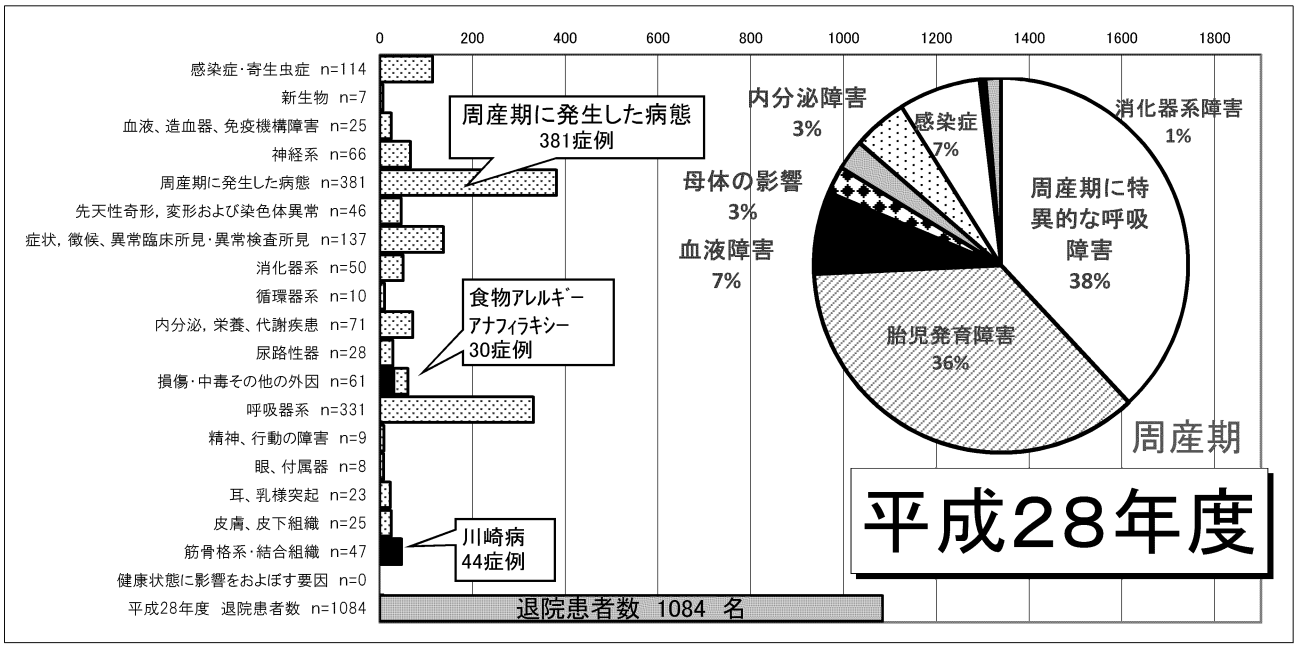
3　来年度の課題

一般診療、救急医療はもとより、乳児健診、一時中断となっていた基礎疾患のない児への予防接種を含むプライマリ・ケアを行い、地域医療機関と密に連携をとり、包括的で質の高い小児医療を提供することを目指していきたい。

（文責　秋山　直枝）


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=265
新生物 n=2
血液、造血器、免疫機構障害 n=51
神経系 n=83
周産期に発生した病態 n=254
先天性奇形，変形および染色体異常 n=28
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=183
消化器系 n=69
循環器系 n=27
内分泌，栄養、代謝疾患 n=80
尿路性器 n=37
損傷・中毒その他の外因 n=39
呼吸器系 n=808
精神、行動の障害 n=15
眼、付属器 n=6
耳、乳様突起 n=26
皮膚、皮下組織 n=44
筋骨格系・結合組織 n=50
健康状態に影響をおよぼす要因 n=1
平成26年度 退院患者数 n=1685
周産期に発生した病態
254症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
18症例
川崎病
41症例
内分泌障害
2%
母体の影響
5%
血液障害
8%
感染症
2%
消化器系障害
2%
周産期に特
異的な呼吸
障害
37%
胎児発育障害
41%
周産期
平成26年度
退院患者数 1685 名


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=238
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=38
神経系 n=75
周産期に発生した病態 n=359
先天性奇形，変形および染色体異常 n=45
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=164
消化器系 n=44
循環器系 n=22
内分泌，栄養、代謝疾患 n=58
尿路性器 n=59
損傷・中毒その他の外因 n=67
呼吸器系 n=495
精神、行動の障害 n=25
眼、付属器 n=4
耳、乳様突起 n=23
皮膚、皮下組織 n=27
筋骨格系・結合組織 n=37
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成27年度 退院患者数 n=1400
周産期に発生した病態
359症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
29症例
川崎病
33症例
内分泌障害
4%
母体の影響
7%
血液障害
3%
感染症
2%
外皮・体温障害
3%
周産期に特異
的な呼吸障害
49%
胎児発育障害
29%
周産期
平成27年度
退院患者数 1400 名


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=114
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=25
神経系 n=66
周産期に発生した病態 n=381
先天性奇形，変形および染色体異常 n=46
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=137
消化器系 n=50
循環器系 n=10
内分泌，栄養、代謝疾患 n=71
尿路性器 n=28
損傷・中毒その他の外因 n=61
呼吸器系 n=331
精神、行動の障害 n=9
眼、付属器 n=8
耳、乳様突起 n=23
皮膚、皮下組織 n=25
筋骨格系・結合組織 n=47
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成28年度 退院患者数 n=1084
周産期に発生した病態
381症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
30症例
川崎病
44症例
内分泌障害
3%
母体の影響
3%
血液障害
7%
感染症
7%
消化器系障害
1%
周産期に特
異的な呼吸
障害
38%
胎児発育障害
36%
周産期
平成28年度
退院患者数 1084 名

■外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副院長	柏木　秀幸	部長	梶本　徹也
副部長	吉田　清哉	副部長	良元　和久
副部長	坪井　一人	副部長	道躰　隆行
医長	阿部　恭平	医長	谷田部　沙織
医員	浮池　梓（～６月）	専任医師	原田　篤（～６月）
専任医師	北川　隆洋（～６月）	医員	市原　恒平（７月～）
専任医師	石川　あい（７月～）	専任医師	小林　康伸（７月～）

2　平成 28 年度の診療実績

食道良性手術（アカラシアや逆流性食道炎など）13 件、食道がん手術 7 件、スリーブ状胃切除術（減量手術）16 件、胃・十二指腸良性手術 19 件、胃がん手術 44 件、小腸手術（腸閉塞や悪性疾患など）35 件、虫垂切除術 76 件、大腸手術 117 件、肛門手術（痔疾患など）11 件、人工肛門手術 23 件、そけいヘルニア/腹壁ヘルニア手術 110 件、胆嚢・胆管結石手術 76 件、肝臓/胆道がん手術 23 件、膵臓がん手術 17 件、乳がん手術 53 件、呼吸器手術 14 件

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
上部消化管	73	78	99
下部消化管	186	266	262
肝胆膵	97	127	116
ヘルニア	118	143	110
呼吸器	23	34	14
乳腺	39	48	55
手術総数（鏡視下手術）	766(252)	765(245)	796(284)

3　来年度の課題

平成 28 年４月から当院は地域がん診療病院に認定され、外科では、今まで以上にがん診療に重点を置いた診療を行っている。診断や手術だけではなく、術後補助化学療法や、手術不能・再発症例に対する化学療法、放射線治療や IVR にも深く関わっている。また、必然的に緩和医療（緩和ケア）にも重点を置いており、入院患者に対しては、緩和ケアチームによるラウンド（全ての病棟）を毎週行い、外部講

師および当院スタッフによる緩和ケア勉強会を毎月開催している。隔週の緩和ケア外来では、地域連携に根差した診療を提供している。

外科手術は、年々増加している。緊急手術を除く定時手術の待機期間は１～２か月であり、可能であれば２～３週間に短縮したいと考えている。そのため、麻酔科および手術室スタッフと協力して、手術室の効率的運用を図っていく予定である。

鏡視下手術可能であると判断する症例は、可能な限り鏡視下手術を行っている。呼吸器手術はほぼ全例、消化器・ヘルニア手術も半数近くは鏡視下手術である。鏡視下手術の増加に伴い、手術の定型化が進み、手術技術は向上し、手術時間は短縮している。今後は、下部消化管を含めた緊急手術における鏡視下手術件数を増やしたいと考えているが、麻酔科や手術室の協力が必要で、外科医も３人必要である。

３年前から開始した肥満手術（減量手術）は順調に増加しており、昨年度は 16 例の手術を合併症なく行っている。他院からの紹介よりも、口コミやウェブサイトを見て減量外来を受診する患者の方が多い。現時点で、静岡県内で肥満手術を手掛けている施設は他に無く、今年度も昨年度以上の手術件数が期待される。

当院では高リスクの患者が多く、手術合併症が無くなることはないが、これからも、より安全な外科治療を目指したい。

（文責　梶本　徹也）

■整形外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
嘱託診療参事	永井　素大	部長	加藤　努
医長	村上　宏史	専任医師	嶺　崇文
専任医師	勝見　俊介（～６月）	専任医師	小川　三千代（～6月）
専任医師	山下　隆之（7～12月）	専任医師	山口　雅人（７月～）
専任医師	船井　充（１月～）		

2　平成 28 年度の診療実績

富士市の二次救急病院として、多くの外傷患者の診療・治療を行っている。本医療圏は二次産業が多いため、一般的な骨折外傷だけでなく、労災や交通外傷での多発性外傷の対応をすることが多い。また、近年の高齢化社会に伴い、合併症を伴う大腿骨頚部骨折などの治療も多く行った。年間手術件数は約 600 件であり、変形性関節症疾患としての人工関節手術も年間 50 件程度と年々増加してきている。平成 28 年度からは、骨バンクの運用が開始されており、難治療症例に対応できるようになった。

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
人工関節置換術	35	40	51
大腿骨近位部骨折 （骨接合術・人工骨頭置換術）	249	254	212
その他	324	309	328
合計手術件数	608	603	591

3　来年度の課題

依然として富士宮地区の患者受け入れに関する問い合わせが多く続いている。病床利用数の高い状態が慢性化しているが、富士・富士宮地区の手術患者の受け入れをスムーズに行えるよう体制を整えていきたいと思う。

当院の特徴となる人工股関節手術をアピールし、手術件数・実績の向上を目指し、結果として富士市の基幹病院にふさわしい質の高い医療を提供できるよう、努力する所存である。

（文責　加藤　努）

■形成外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	平川　正彦	医員	赤石　渉（～３月）
医員	西村　礼司（２月～）		

2　平成 28 年度の診察実績

平成 28 年度の診療実績は下記のとおりである。（参考：平成 26・27 年度併記）

		入院手術			外来手術			合　計		
		H26	H27	H28	H26	H27	H28	H26	H27	H28
外傷	四肢	56	98	69	61	60	100	117	158	169
	顔面	10	10	12	35	24	37	45	34	49
	熱傷	1	7	3	0	1	0	1	8	3
腫瘍	良性	40	36	48	182	213	223	222	249	271
	悪性	14	11	17	18	16	18	32	27	35
	腫瘍切除後再建	6	0	1	2	0	0	8	0	1
瘢痕・ケロイド		7	3	4	14	11	21	21	14	25
皮膚潰瘍		6	4	5	2	0	0	8	4	5
炎症性疾患		19	26	24	76	54	92	95	80	116
先天異常		10	6	11	8	1	4	18	7	15
総合計		169	201	194	398	380	495	567	581	689

3　来年度の課題

（1）診療体制が変わるが、これまでと同様の診療を維持できるよう努力する。

（2）手外科と再建外科を中心に、救急にも積極的に対応していきたいと考えている。

（3）他科の先生方と協力して治療にあたる機会を増やしていきたい。

（文責　西村　礼司）

■脳神経外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	諸岡　暁	副部長	野田　靖人
医長	吉野　薫	専任医師	園田　章太（～９月）
専任医師	武井　淳（10 月～）		

2　平成 28 年度の診療実績

脳血管内治療専門医が非常勤（週１日）となった。脳血管内手術が必要な場合には、緊急手術でも東京慈恵会医科大学から専門医の派遣があり対応している。

脊椎外科専門医は月１回の外来診療を継続。脊椎手術が必要な場合には、東京慈恵会医科大学から専門医の派遣があり対応している。脊椎診療施設の少ない医療圏において大きな役割を担っている。

10 月に、脳神経外科専門医となった武井医師が再赴任した。

入院疾患の割合および手術数は表の通り。

（１）入院疾患別頻度(%)

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
くも膜下出血	5	7	7
脳出血	16	13	19
脳梗塞	15	15	17
頭部外傷	42	39	38
腫瘍	1	4	5
脊椎	1	0	3
血管内治療関連	－	6	5

（２）手術件数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
頭部手術	104	123	151
１）開頭手術	31	44	37
２）神経内視鏡手術	3	1	2
３）脳血管内手術	17	26	25
脊椎手術	1	1	9

・頭部外傷は軽症も１泊入院で慎重に診ている。
・脳卒中が少し増加した。脳卒中地域連携パスが機能しており、良い時期にリハビリテーション病院に転院できて在院日数は適正である。
・手術総数は５年間増加傾向である。
・脊椎手術を再び引き受けるようになった。需要は依然として多い。
・脳血管内治療数は横這いである。治療適応、開頭術との選択をしっかり検討している。

３　来年度の課題
・救急症例は引き続き全例受け入れる方針である。
・リハビリテーション病院と連携し、ベッドの有効利用を図る。
・血管内治療専門医および脊椎手術専門医が再度常勤となるよう東京慈恵会医科大学脳神経外科学教室へ要請していく。
・４月からはレジデントが派遣される予定のため、初期教育に努める。

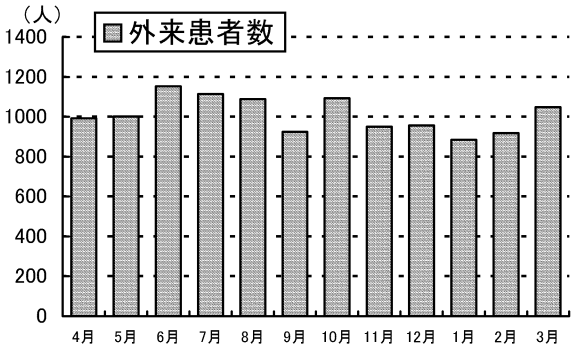
（文責　諸岡　暁）

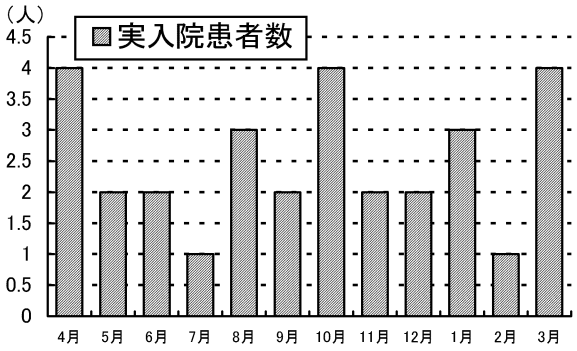
■皮膚科

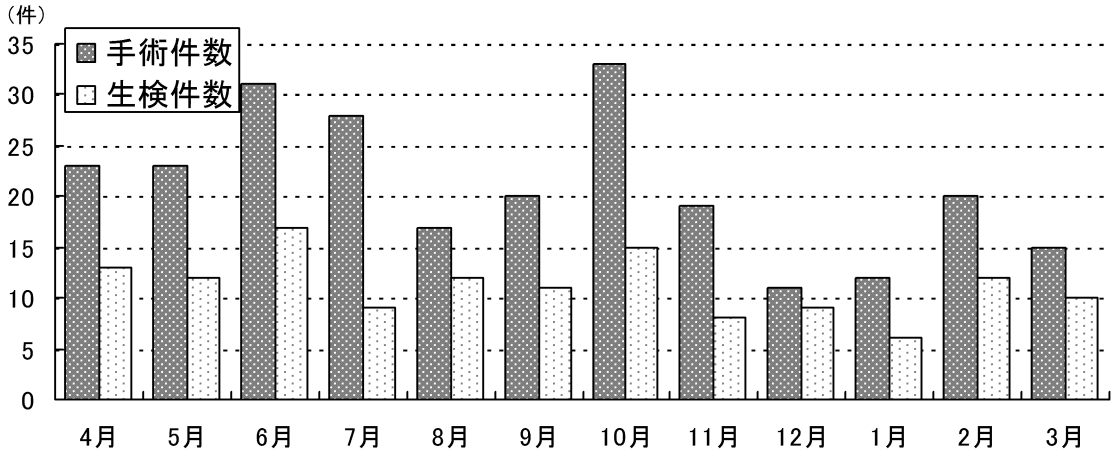
1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	津嶋　友央	医長	栗原　和生

2　平成 28 年度の診療実績







	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
外来患者数	11, 519	11, 737	12, 127
実入院患者数	43	43	30
手術件数	167	228	252
皮膚生検件数	112	131	134

3　来年度の課題

入院適応のある症例は、患者の症状に合わせて入院治療を進め、より質の高い医療を提供する。

（文責　津嶋　友央）

■泌尿器科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
院長	小野寺　昭一	部長	後藤　博一
副部長	鈴木　英訓	副部長	下村　達也（７月～）
専任医師	森　啓一郎（～６月）	専任医師	倉内　崇至（７月～）

2　平成 28 年度の診療実績

平成 28 年度は大学からの常勤派遣医師が７月より１名増え、常勤医５名と非常勤２名で診療を行った。良性疾患、悪性疾患、先天性疾患など泌尿器科領域全般の疾患に対し、初期治療から緩和医療、終末期治療まで一貫した診療を行っている。

さらに、入院診療・手術施行可能な地域の基幹病院の泌尿器科として、24 時間体制で診療を行っており、地域連携においては二次診療だけでなく、場合によっては一次診療や三次診療まで行っている。平成 27 年度から開始した腹腔鏡手術の件数も順調に増加し、今年度は 24 症例に対して腹腔鏡下腎摘出術を問題なく施行した。進行性の尿路上皮癌や去勢抵抗性前立腺癌に対しては、積極的に化学療法を導入し、通院治療も行っている。泌尿器科女性専用外来も、非常勤の女性医師が引き続き担当し、順調に診療が行われている。

主な手術の年次推移

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
経尿道的前立腺切除術	51	36	32
経尿道的膀胱腫瘍切除術	116	130	150
腎悪性腫瘍手術	15	10	26
膀胱結石・異物摘出術	18	23	18
経皮的腎婁造設術	23	8	13
体外衝撃波結石破砕術	587	536	531
年間手術件数（ESWL 除く）	289	275	317

3　来年度の課題

平成 29 年度は東京慈恵会医科大学からの派遣が１名増員され、外来担当を２名体制で行うことが可能となり、待ち時間軽減などの改善を図る予定である。

手術件数を今以上に増加させ、特に腹腔鏡下手術の症例を増やし、平成 29 年度中には前立腺全摘術にも適応を拡げる予定である。

また、他の医療機器や診療システム、地域連携の充実を図り、一貫した結石治療や担癌患者に対する治療を行っていきたい。　　（文責　後藤　博一）

■産婦人科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	鈴木　康之	医長	長谷川　瑛
医長	矢田　大輔	医員	松木　翔太郎
専任医師	東堂　祐介	専任医師	鈴木　崇公
専任医師	榛葉　頼子		

2　平成 28 年度の診療実績

地域周産期母子医療センターとして富士医療圏域における周産期医療を担っている。小児科および産科スタッフ等による周産期カンファレンスは毎週木曜日に開催され、ハイリスク妊娠、分娩（切迫流早産、多胎妊娠、胎児発育不全、妊娠高血圧症候群、胎児機能不全、胎盤異常などの他、各科医師の協力下において糖尿病、腎臓病、血液疾患、呼吸器疾患、精神疾患等の合併妊娠も含む。）の対応を検討している。また、分娩後 NICU 入院患者の中で重症新生児仮死などについては適宜、症例検討を行い今後の臨床に役立てている。

富士医療圏の総分娩数は減少傾向であるが、当院は医療圏の母体搬送のほとんど全てを受け入れておりハイリスク妊娠、分娩数は横ばいである。妊産婦の高年齢化も顕著である。

婦人科良性疾患（子宮筋腫、卵巣嚢腫など）の手術は緊急手術も含め、半数以上が腹腔鏡下手術となっている。悪性腫瘍手術は開腹で行っているが数は増えていない。

生殖医療は体外受精－胚移植、顕微授精を行っており、採卵数は微増だが胚移植数は著増した。また患者さんが高齢化する中で妊娠率向上を図るため、胚の補助孵化操作も取り入れた。また平成 27 年より若年がん患者さん（乳がん、直腸がん等）の卵子凍結保存などに対応する静岡がん生殖医療ネットワークに参加しているが男性がん患者さんの精子凍結も数件あった。

女性の生涯にわたるヘルスケアを目指し、卵巣欠落症状、更年期障害に対するホルモン補充療法、子宮脱による排尿障害にも女性外来等で対応している。

主な診療実績

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
分娩件数	700	698	679
母体搬送受入数	95	89	89

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
帝王切開件数	188	201	169
ハイリスク分娩（保険算定件数）	133	139	133
内視鏡下（腹腔鏡下および子宮鏡下）手術数	174	175	193
良性疾患（開腹及び膣式）手術数	189	151	152
悪性腫瘍手術数	30	22	23
総手術数	613	549	537

生殖補助医療

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
人工授精件数	108	106	102
体外受精件数	76	81	98
融解胚移植件数	68	107	160

３　来年度の課題

富士市の人口ピラミッドを見ると５歳以下は年々減少し、平成 29 年度に入ると０歳から２歳児までは 2,000 人／歳を切ると予想されている。結果、分娩数が減っている訳であるが、中央病院産婦人科医としては、妊娠適齢期の啓発と生殖医療成績の向上、ハイリスク患者の安全安心な妊娠分娩を目指すことが市民生活への貢献に繋がると考えている。健康な児を得るためには小児科医師、看護師、その他のスタッフとの連携が重要であり、周産期カンファレンスの一層の充実を図ってきたい。

婦人科手術は内視鏡手術が増えているが、より早く安全に行うためのスキルアップが必要である。また、より侵襲が少なく手術時間も短い膣式手術の再評価も考えたい。悪性腫瘍手術は県立がんセンターのカンファレンス、手術見学に若手医師が参加しており、地域がん診療病院として連携をより密にしていきたい。

（文責　鈴木　康之）

■眼科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	藤谷　暢子	医長	渡辺　勝

2　平成 28 年度の診療実績

外来診療は、眼科医２名、視能訓練士３名、看護師２名、医療補助１名、受付１名で行った。平成 28 年度は、４月に視能訓練士１名が退職し、２名の新規採用があったため、視能訓練士は１名増員となり、検査スタッフが充実してきた。

通常以上に点眼処方を希望される患者さんには、看護師が点眼指導も行う等、きめ細かい対応を行った。

基本的に、月・火・水・金曜日は２診、木曜日は１診であった。平成 27 年 12 月まで１診は水曜日であったが、平成 28 年１月から曜日の変更があった。

午前中は、紹介予約枠を使った紹介初診を最優先とし、９時から予約診察を行っている。予約外や初診も 11 時までの受付で診察可能である。午後は完全予約検査であり、視野検査、眼位検査、レーザー、蛍光眼底撮影、抗ＶＥＧＦ薬硝子体注射、涙点プラグ・鼻涙管シリコンチューブ挿入・霰粒腫等の外来小手術、小児の弱視・斜視外来を行っている。

平成 24 年から開始したロービジョン外来も、続けている。月１回予約制で、補助具を合わせ、日常生活のアドバイスを行っている。iPad によるロービジョンケアも取り入れており、他院からのロービジョン外来のみのご紹介にも対応している。

また、平成 26 年から始めたオルソケラトロジーも行っている。まだ処方数は少ないが、今後も継続していく。

山梨大学眼科から飯島裕幸教授にお越し頂き、診察して頂く教授外来も継続している。今後も、２ヶ月に１回、難症例を診て頂くことで、患者さんのためだけでなく、我々の診療技術の向上にもなると考えている。

中央手術室での手術は、月曜午後と火曜午後に行っている。白内障を中心に、緑内障、翼状片、斜視、眼瞼内反症など行っている。

白内障手術は、片眼２泊３日の入院で行ってきたが、日帰り手術も開始した。様々な理由で入院することが難しい患者さんのニーズに応えたもので、徐々に件数が増えている。認知症や精神発達遅滞等のために全身麻酔で行う症例も増えており、その場合、入院は４日となる。

硝子体手術については、月１回、山梨大学から専門医を招き、少数ながら万全の体制で行っている。

手術室での眼科手術

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
白内障手術	205	198	232
緑内障手術	10	9	12
硝子体手術	20	24	16
網膜剥離手術	1	1	2
強角膜縫合術	1	0	0
翼状片手術	3	4	5
斜視手術	0	0	1
眼瞼内反症手術	3	4	4
その他	2	5	2
計	245	245	271

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
抗 VEGF 硝子体注射	108	191	173

3　来年度の課題

手術については、近隣に手術を行う眼科クリニックが多く、当科で行うものは全身状態も目も難しい症例の比率が高い。そのため、限られた時間枠で手術件数を大幅に増やすことは難しいが、白内障・硝子体手術装置を更新により、難症例の白内障手術が今までより容易になった。白内障日帰り手術を導入したことも、より一層周知していき、昨年度より更に手術症例の増加を目指す。

緑内障手術については、近年新しい術式が広まりつつあり、当科でも導入している。今後の経過次第で、積極的に進めていく。

当科の位置付けとしては、他院・他科との連携である。開業医の先生との連携をもっと密にするよう工夫したい。他科とも積極的にコミュニケーションを取り、多方向からの加療を目指す。

また、ロービジョンケアは、患者さんが諦める前の働きかけが大事である。視能訓練士が増員したことを活かし、早めから患者さんのニーズを掘り起こし、残された機能を最大限使えるよう、お手伝いしていきたい。

オルソケラトロジーも軌道に乗せたい。また、多焦点眼内レンズや ICL 近視矯正手術といった過去に行ってこなかった治療にも、今後取り組む予定である。

（文責　藤谷　暢子）

■耳鼻咽喉科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	重田　泰史	医員	倉島　彩子（～９月）
医員	内尾　紀彦（10 月～）	専任医師	黒田　健斗

2　平成 28 年度の診療実績

耳鼻咽喉科は３人体制で診療を行い、耳、鼻、咽喉頭、頸部の診断・治療を幅広く行っている。午前中は一般外来を行い、特別な治療や処置が必要となる患者さんは、午後に来ていただき治療、処置を行っている。

手術日は火・水・金曜日の週３日間で、高度な技術を必要とする手術は東京慈恵会医科大学の医師を招聘し行っている。

進行癌症例は、静岡県立静岡がんセンターと連携している。また当科の特色として、嚥下障害患者に対する診断・治療を積極的に行い、院内の絶食患者のより安全な経口摂取の再開を目指している。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
嚥下機能評価患者	196	148	107
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	114	145	116
鼻中隔矯正術	77	72	76
口蓋扁桃摘出術	140	54	136

3　来年度の課題

平成 28 年度はスタッフの異動などあり、外来数・入院数が大幅に減少したが、手術件数等は増加傾向となっており、さらに増加できるよう努力したいと考えている。

（文責　重田　泰史）

■放射線科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
医長	松井　洋		

2　平成 28 年度の診療実績

引き続き CT、MRI、RI に関しては可及的迅速に全件読影を行っており、画像診断管理加算２（CT/MR/RI の８割以上の読影結果が常勤専門医により遅くとも撮影日の翌診療日までに主治医に報告される事を条件に、１件ごとに 180 点算定される）の算定施設基準を維持することができた。

IVR に関しては肝癌に対する TACE を中心として、幅広い処置を施行しており、近年では表在血管腫に対する硬化療法が増加傾向である。

IVR 部門

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
合計	178	136	158
Vascular IVR	103	73	115
肝癌の化学塞栓／動注化学療法	42	20	36
肝切除術前の経皮経肝的門脈塞栓	1	0	3
胃静脈瘤のバルーン閉塞下逆行性塞栓(BRTO)	3	5	1
喀血に対する気管支動脈塞栓（BAE）	2	1	6
透析シャントの血管形成術（PTA）	0	1	2
静脈サンプリング（副腎、膵臓、下垂体など）	7	1	5
PICC Line 挿入	18	21	22
緊急止血術	22	17	24
その他	7	7	16
Non-vascular IVR	65	58	43
経皮的生検	11	6	0
膿瘍に対する経皮的ドレナージ	42	30	25
経皮的胆道ドレナージ、ステント留置	9	17	7
肝癌のラジオ波焼灼術（RFA）	1	0	0
血管腫に対する硬化療法	1	5	9
その他	1	0	2

読影件数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
総読影件数	32,210	32,007	34,817
CT	19,187	18,687	20,683
MRI	5,378	5,312	5,563
US	6,837	7,072	7,594
アイソトープ	808	936	977

病診連携件数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
高度医療機器利用依頼	1,598	1,709	1,768

放射線治療人数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
患者数	275	144	145
頭頸部	21	2	9
胸部	104	39	65
腹部	28	4	12
骨盤	75	28	26
骨軟部	47	66	25

３　来年度の課題

・他科との連携をさらに密にしていく。

・IVR 業務の拡充

・読影管理加算２の算定施設基準を維持する。

・病診連携（高度医療機器利用依頼）にさらに力を入れ、逆紹介率向上に貢献する。

（文責　道本　顕吉）

■麻酔科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	井上　恒佳	副部長	銅谷　実（～４月）
副部長	大谷　法理（７月～）	医長	影山　佳世
医長	飯田　瑠梨（～９月）		

2　平成 28 年度の診療実績

過去３年間の麻酔科管理手術症例の推移は下表のとおりである。

本年度は常勤医の入れ替わりが多かったため、昨年度と同じ手術枠での運用を行った。結果として麻酔科管理総数は昨年度に比して微減したものの、全身麻酔自体はほぼ同程度の件数を行うことができた。

また、昨年度からの懸案であった非常勤医師の人数調整・再配分を行い、東京慈恵会医科大学麻酔科学講座の協力のもと、平日すべてで非常勤医師の派遣をおこなってもらっている。これにより麻酔科医を余らせることも少なくなり、効率的な手術室運営を行えるようになってきている。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
麻酔科管理総数	1,573	1,582	1,542
全身麻酔 （他の麻酔法の併用を含む）	1,517	1,495	1,499
硬膜外麻酔・脊椎くも膜下麻酔 （どちらか一方・両者併用を含む）	7	57	29
その他	49	30	14

3　来年度の課題

手術件数の増加という手術管理科の目標のもと、麻酔科としても手術枠の拡充に積極的に協力していく。そのためには麻酔科勤務医の確保が引き続きの課題となる。

来年度からは麻酔の件数増加だけでなく、質の向上についても取り組んでいきたい。術後回診からのフィードバックだけでなく、各科からの意見なども取り入れることで患者にとってよりよい周術期管理ができる環境づくりを行っていく所存である。

また、昨年度の課題であった各科麻酔への積極的な介入については、徐々にではあるが行えるようになってきている。患者の安全にもつながることであるので、来年度も継続して行っていく。　（文責　井上　恒佳）

■病理診断科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	遠藤　泰彦		

2　平成 28 年度の診療実績

病理組織診断	5,116 件
（内、術中迅速診断）	138 件
細胞診断	4,709 件
病理解剖	6 件
CPC 開催	年４回
各診療科とのカンファレンス	多数

常勤医師１名、非常勤医師１名、臨床検査技師・細胞検査士４名、医師事務作業補助者１名を含めた構成で業務を行っており、場合によっては東京慈恵会医科大学との連携のもと診断を行うこともある。下表（過去３年の実績）で示したとおり、診断件数は年々明らかに増加してきており、また免疫染色の件数に関しても明らかな増加が認められる。

※ 過去３年間の診断件数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
組織診断 （内、術中迅速診断）	4,531 (100)	4,679 (114)	5,116 (138)
細胞診断	3,952	4,047	4,709
病理解剖	8	11	6

3　来年度の課題

当科は市内唯一の“病理診断科”である。正しい病理診断が治療の第一歩であり、迅速かつ正確な診断を心がけ取り組んでいる。一人でも多くの患者が安心して、より質の高い医療を受けていただけるよう励んでまいる所存である。

（文責　遠藤　泰彦）

■歯科口腔外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	勝山　直彦	副部長	井出　正俊
医員	本間　彰人		

2　平成 28 年度の診療実績

地域基幹病院の口腔外科として主に難抜歯、外傷、炎症、腫瘍、嚢胞、粘膜疾患、奇形・変形の手術を行っている。当科は、一般開業医では処置困難な症例を扱い、通常の歯科治療は行っていない。

平成 28 年度外来局所麻酔手術は、1,932 例であった。

全身麻酔または静脈麻酔の症例は、難抜歯が最も多く、ついで嚢胞、外傷の順であった。

手術症例

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
難抜歯	1,621	1,792	1,619
嚢胞	82	86	88
外傷	13	22	14
その他	222	235	211
計	1,938	2,135	1,932

3　来年度の課題

今後、地域基幹病院の口腔外科として地域医療機関と密な連携を図り、手術症例を増やしたいと考えている。平成 28 年度と同様に、顎変形症について、県東部の歯科矯正医との連携をとり症例を増やす予定である。

また、周術期口腔ケアを開始したので、今後各科と連携し充実させる。

当院は、地域の基幹病院として、市民のために質の高い医療を提供できるよう研鑽・努力していきたい。

（文責　勝山　直彦）

■手術管理科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	良元　和久		

2　平成 28 年度の診療実績

手術室の安全性や効率性の向上を目指し、手術室全体の運用や診療部の調整、緊急時の対応ができる管理体制を構築するために平成 28 年度から新設された診療科である。

・手術件数等は手術室運営委員会の「平成 28 年度の取組実績」を参照。
・特殊カンファレンスを行い、安全な手術運営を行った。（平成 28 年度 3 回開催）

3　来年度の課題

・診療部各科並びに手術室スタッフと協力し、更なる手術室の効率的な運用を目指す。
・手術医療機器の更新等の見直しを行い、適正な機器の選定、管理を行う。

（文責　良元　和久）

■非常勤医師

（平成 28 年４月１日現在）

所　属	氏　　名	所　属	氏　　名
糖尿病･内分泌･血液内科	谷口　幹太	糖尿病･内分泌･血液内科	比企　能人
消化器内科	梶原　幹生	内科（内視鏡）	内山　勇二郎
内科（内視鏡）	加藤　正之	内科（膠原病）	野田　健太郎
神経内科	森田　昌代	精神神経科	品川　俊一郎
精神神経科	三宮　正久	心臓血管外科	橋本　和弘
心臓血管外科	高木　智充	心臓血管外科	成瀬　瞳
心臓血管外科	村山　史朗	外科（内視鏡）	増田　勝紀
外科（内視鏡）	宮川　朗	外科（呼吸器）	森川　利昭
リハビリテーション科	殷　祥洙	脳神経外科	坂本　広喜
脳神経外科	秋山　雅彦	泌尿器科	阿部　和弘
泌尿器科	平本　有希子	産婦人科	金山　尚裕
産婦人科	廣中　由紀	眼科	飯島　裕幸
放射線科	竹永　晋介	放射線科	大木　一剛
放射線科	東條　慎次郎	放射線科	渡嘉敷　唯司
放射線科	成田　賢一	放射線科	榎　啓太朗
放射線科	前田　寿世	放射線科	道本　顕吉
放射線科	大内　厚太郎	放射線科	五味　拓
麻酔科	村上　裕一	麻酔科	大谷　法理
麻酔科	渡邉　薫	麻酔科	渡邊　朋子
麻酔科	梁木　理史	麻酔科	篠原　仁
麻酔科	上園　晶一	麻酔科	阿部　建彦
麻酔科	渡邊　朋子	病理科	千葉　諭
歯科口腔外科	磯田　浩太	歯科口腔外科	阿部　恵一
歯科口腔外科	森永　桂輔	歯科口腔外科	岡村　尚
歯科口腔外科	砂田　勝久	歯科口腔外科	小林　清佳
歯科口腔外科	児玉　実穂	歯科口腔外科	岡山　浩美

■臨床研修医

氏　　名	採　用　期　間
白坂　和美	平成 27 年４月１日～平成 29 年３月 31 日
坊　英明	平成 27 年４月１日～平成 29 年３月 31 日
遠藤　憲彦	平成 28 年４月１日～平成 30 年３月 31 日

■臨床検査科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	石川　隆之	副技師長	鈴木　雅人
参事補兼主任	渡邉　修	参事補兼主任	渡邉　由喜子
参事補兼主任	鈴木　英昭	主任	大芝　孝次
主任	岩崎　佐知子	主任	小野　美代子
主任	長峰　誠一郎	主査	野田　文子
主査	遠藤　聡	主査	佐野　僚子
主査	渡邉　広明	主査	石井　孝良
主査	山本　純子	上席技師	大野　真一
上席技師	手老　真弓	上席技師	阿部　愛
上席技師	尾形　裕以	技師	内野　有子
技師	清　亜矢	技師	渡邉　恭子
技師	竹下　翔太	技師	池田　琢
技師	関　三千代	技師	後藤　理紗
技師（R）	加藤　才子	技師（R）	加藤　加代子
技師（R）	左原　泰子	技師（R）	後藤　隆広
技師（R）	宇佐美　由紀子	技師（R）	塩田　幸子
技師（R）	中山　智美	技師（R）	外山　卓矢
技師（R）	渡邊　真理子	技師（P）	高橋　昌子
医療補助員	芹澤　好子	ＢＭＬ事務員	原　久美

※（R）は臨時職員、（P）はパート職員

2　平成 28 年度の業務実績

血液検体件数の推移

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
検体総件数	2.361.193	2.381.176	2.635.843
日直・当直検査数	49.768	53.775	56.106
人工受精・体外受精	179	194	197
胚移植融解	85	107	161
妊婦健診（エコー）	2.079	2.269	2.289
輸血総数(単位＋本数)	19.391	15.623	18.518
剖検数	13	12	6
採血患者数	63.291	65.593	69.491

・プロカルシトニン、心筋トロポニンＩの院内測定を開始した。
・パニック検査値の緊急連絡体制を確立し施行した。
・特殊検査委託業者の選定を行いBMLに継続依頼した。
・血液培養自動測定装置バクテアラートを増設し運用開始した。
・血中薬物濃度の採取時間を検査システムに自動送信されるよう変更した。
・臨床検査システムをCANシスメックスLa-vietal LSに更新した。
・全自動化学発光酵素免疫測定装置をAIA-CL2400に更新した。
・赤血球沈降速度測定装置をVES-MATIC30に更新した。
・脳波計をデジタル脳波計ニューロファックスに更新した。
・電子カルテシステム運用マニュアル、臨床検査１～５を改訂した。
・救急心電図の依頼を代行入力が行えるよう変更した。
・HCV定性測定試薬を感度と特異性が向上した新試薬に変更した。
・臨床病理検討委員会CPCの要領改訂を行った。
・病理解剖遺族承諾書の改訂を行った。

＜各種認定等資格取得者状況＞

名　称	人数	名　称	人数	名称	人数
細胞検査士	６名	認定輸血検査技師	２名	認定血液検査技師	３名
認定一般検査技師	１名	認定超音波検査士	４名	生殖補助医療胚培養士	３名
体外受精コーディネーター	１名	日本糖尿病療養指導士	３名	心臓リハビリテーション指導士	１名
緊急臨床検査士	１名	健康食品管理士	１名	未病専門指導師	１名
認定心電技師	１名	栄養サポートチーム療法士	１名	認定病理検査技師	２名

※平成28年度新たに認定血液検査技師１名、認定病理検査技師１名取得した

３　来年度の課題

・診療部、看護部、診療技術部との密な連携を図り、様々な要望に応えながらチーム医療に貢献できるよう業務や人員配置の改善を行うと共に、知識、技術向上、認定専門資格取得に向けて挑戦できるような職場環境作りを心掛け人材育成を目指したい。
・検査システム、分析装置の整備や精度管理に努め、迅速で正確な検査結果の報告が行えるよう管理体制の改善を積極的に行いたい。
・診療部と連携し院内での新規測定項目を積極的に検討していきたい。

（文責　石川　隆之）

■中央放射線科

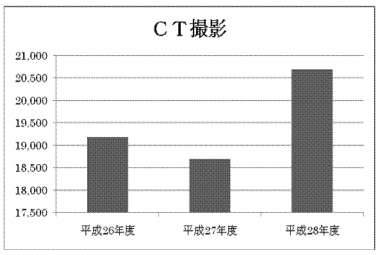
1　スタッフ

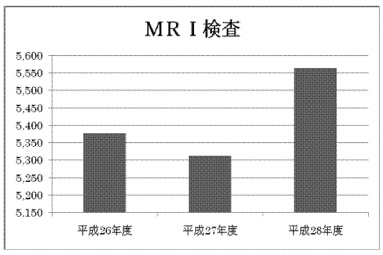
役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	井出　宣孝	副技師長	高木　省一
参事補兼主任	清水　則雄	参事補兼主任	遠藤　佳秀
参事補兼主任	遠藤　一弘	主任	池谷　幸一
主任	鈴木　和訓	主任	菅原　和仁
主任	杉山　伸一	主任	鍋島　雄和
主任	稲垣　伸一	主査	酒井　理香
主査	井出　敦之	主査	澤口　信孝
主査	大森　知枝	主査	猪股　崇亨
主査	岡田　和教	上席診療放射線技師	太田原　絢子
上席診療放射線技師	秋田　真弓	上席診療放射線技師	岡根谷　侑
上席診療放射線技師	鈴木　浩之	診療放射線技師	神田　直樹
診療放射線技師	増田　裕司	診療放射線技師	湯山　桃子

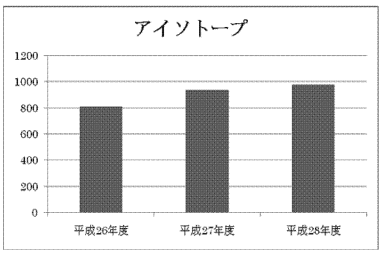
2　平成 28 年度の業務実績　　（人）

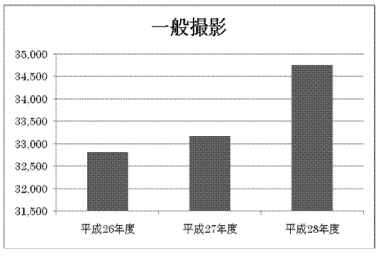
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
一般撮影	32,816	33,171	34,747
乳房撮影	414	414	494
ポータブル撮影	9,722	10,045	11,434
心臓カテーテル検査	1,129	1,053	1,154
その他血管造影	198	169	200
ＣＴ撮影	19,187	18,687	20,683
ＭＲＩ検査	5,378	5,312	5,563
アイソトープ	808	936	977
骨塩定量	226	248	327
TV 撮影	949	972	976
結石破砕	591	533	536
放射線治療	3,366	3,514	3,562
口腔外科撮影	2,311	2,510	2,396
超音波検査	6,837	7,072	7,594
画像ファイリング	6,390	6,757	7,034
妊婦検診数	2,079	2,269	2,269

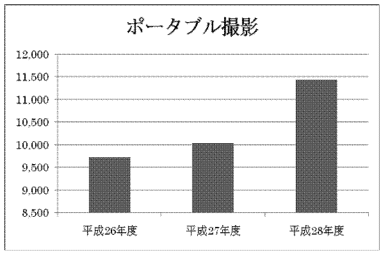
注：本年報の別ページ【９　業務概要(12)放射線撮影件数】は照射件数を記載

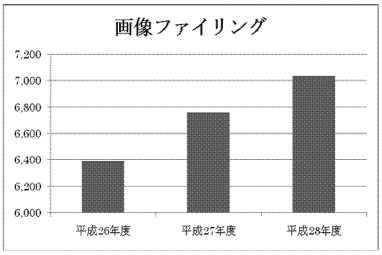












・入院患者数の増加で一般、ポータブル撮影の件数増加が見られた。
・高度医療機器利用の検査数は 1,815 件あり、161 件の増加が見られ、地域医療支援病院の取得に向けて貢献できた。
・５月に 64 列 CT 装置の更新が行われ、検査は昨年実績を大幅に更新し、当日でも撮影が可能な体制構築ができた。
・12 月の電子カルテ更新時は、機器の接続やデータ移行等で大きなトラブルもなく、問題なく更新作業が行われた。
・高エネルギー放射線治療（リニアック）の照射件数は 3,562 件で、現状を維持。引き続き地域がん診療連携拠点病院取得に向け努力していく。

3　来年度の課題

平成 29 年度　目標

「より良い医療を安全に提供」

中央放射線科に要求されている業務は、高精度な診断や治療を行うための情報の提供である。装置の性能を十分に発揮できるように、それを扱う技師も常に最新の技術を取得し、自己研摩していく。

最近の放射線診断機器・治療機器は、著しく早いテンポで進歩している。これらを用いて先進的な医療を実現するためには、知識の習得・技術の向上はもとより、他の部門のスタッフとの連携も重要であり、全てのスタッフがチーム医療の一員としての自覚を持ち、患者さん中心の医療を実現するよう努める。

我々は病診連携（高度医療機器利用）の充実を図り、検査ニーズに応えるべく地域医療レベルの向上に努める所存である。

（文責　井出　宣孝）

■臨床工学科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	西田　英明	副技師長	山元　義雄
主査	佐野　達哉	上席臨床工学技士	勝間田　賢
上席臨床工学技士	諏訪部　新	上席臨床工学技士	杉山　弘一
臨床工学技士	佐野　汐里		

2　平成 28 年度の業務実績

	手術室業務			心カテ室業務（＊３）	ペースメーカー関連
	臨床業務（＊１）		保守点検業務（＊２）		
	定時	緊急			
26 年度	43	4	476	1,018	576
27 年度	51	0	447	962	556
28 年度	60	0	480	1,058	702

	ME 機器室業務（＊４）			血液浄化療法業務（＊５）
	呼吸器関連	心電図モニター関連	輸液ポンプ・吸引関連	
26 年度	1,290	20	6,843	59
27 年度	936	29	6,634	71
27 年度	906	35	5,628	100

ME 機器　教育研修実績（回数）

	26 年度	27 年度	28 年度
呼吸器・輸液ポンプ・IABP・CHDF 等取り扱い勉強会	19	28	11
手術室 ME 機器勉強会	6	7	7

＊１　主に心臓外科手術人工心肺操作、心臓血管外科・整形外科・脳神経外科などの自己血回収装置操作、PCPS 操作。

＊２　主に麻酔器、気化器、炭酸ガスモニタ、IABP、PCPS、人工心肺装置、血液ガス分析装置、除細動器の保守点検。

＊３　心カテ室業務は総数。ペースメーカー（PM）関連は「PM 外来」、「植え込み術」、「植え込み患者手術立会」、「植え込み後チェック」。

＊４　ME 機器室業務。主に呼吸器組立、心電図モニター、輸液ポンプ類点検。

＊５　主に CHDF、PMX、PE、透析室以外での血液透析。

3　来年度の課題

心臓カテーテル及びペースメーカー症例が増加している。また、心臓血管外科医師の増員により手術症例数の増加が見込まれ、緊急手術が行われることも予想できる。当科ではそれらの対応ができるように、新人教育も含め科全体のスキルを上げていきたい。

当科には、呼吸療法認定士５名。透析技術認定士者４名。体外循環技術認定士２名（今年度新たに１名取得）の認定士がおり、それぞれ関連学会に毎年参加し最新の知識及び技術の習得に努め、臨床業務に反映させるように研鑽している。

平成 29 年度は副技師長の定年退職に伴い、副技師長不在となってしまうが、主査を筆頭に科内の役割を再編し「未来に向けての人材育成を強化する初年度」としていく。

臨床工学科が関与している機器は「生命維持管理装置及びそれらに準じた機器」が多く、機器の適正な保守、更新時期などを立案し関連委員会で意見を述べていく。

富士市立中央病院新改革プランに示された「高度急性期医療を担う中核病院」の診療技術部臨床工学科として今後も精進していきたい。

（文責　西田　英明）

■リハビリテーション科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
参事補（作業療法士）	中村　公美	主任（理学療法士）	深澤　史朗
主査（理学療法士）	和泉　裕美子	主査（作業療法士）	竹川　圭亮
上席言語聴覚士	幾島　邦人	上席言語聴覚士	石井　玲奈
理学療法士	永嶋　泰玄	言語聴覚士	宮川　真理子
言語聴覚士	田中　弘美	理学療法士	小田　純一
作業療法士	杉山　かなた	理学療法士	加藤　智乃
理学療法士	山田　将史	理学療法士	若月　優
理学療法士	梅原　健人	医療補助員（R）	鈴木　千智世

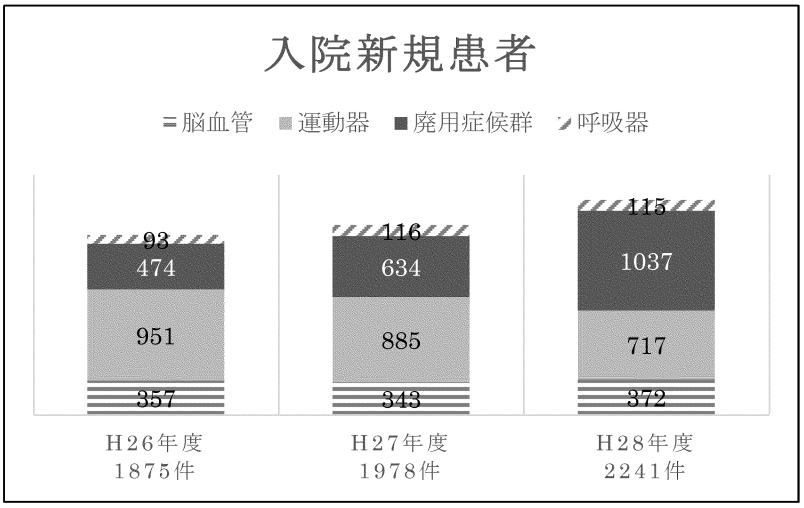
（R）は臨時職員

2　平成 28 年度の業務実績

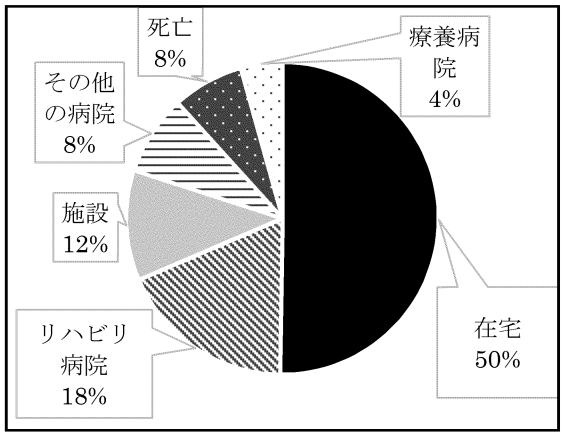
・入院・外来患者に対するリハビリ実施単位数は、本年報の別ページ【９　業務概要(28)リハビリテーション実施状況】を参照。

・年間のリハビリ依頼件数は 2,455 件で、入院 2,241 件・外来 214 件であった。

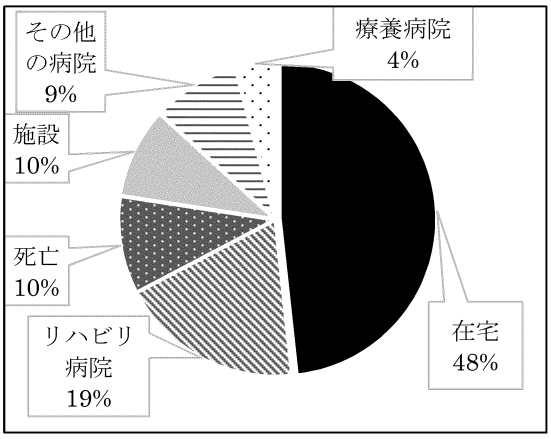
・リハビリ依頼の約９割を入院患者が占め、入院患者の疾患別割合は廃用症候群が 46.3%、運動器疾患が 32%、脳血管疾患が 16.6%、呼吸器疾患が 5.1%であった。平成 27 年度と比べて、運動器疾患が減り、廃用症候群で増加した。



・退院先は平成 27 年度と同様に在宅復帰が全体の半数近くを占め、リハビリ専門病院への転院は全体の約 19%であった。



【平成 27 年退院先】



【平成 28 年退院先】

・リハビリ依頼からリハビリ開始までは 0.9 日（平成 27 年度　0.76 日）で、リハビリ介入率は入院患者全体の 35.2%（平成 27 年度　33%）、リハビリ開始前後の FIM 改善値は平均 19.5 点（平成 27 年度　21 点）だった。リハビリ新規患者数の増加により介入率は増加したが、業務量増加により開始までの日数はわずかに低下した。
・平成 27 年度の課題であった ICU 入室患者リハビリ提供については、介入は増加しているが、目標であった 100%には到達できなかった。
・毎週金曜日のリハビリ回診へ PT・OT・ST が各１名ずつ参加した。
・褥瘡・NST（栄養・摂食嚥下口腔ケア）・呼吸器・緩和ケアの回診に参加した。
・適宜、患者・家族・ケアマネージャー等の他スタッフとのカンファレンスを行った。
・スタッフ間の治療技術・知識共有を図るためのリハビリテーション科勉強会を月に１回開催し、その他にも研修報告会等を開催した。
・看護学校での講師、市民向けの出前講座（認知症１回・転倒予防２回）を行った。

３　来年度の課題

・平成 28 年度同様に周術期患者へのリハビリ提供の充実・ICU 入室患者への 100%リハビリ提供を目指していく。
・平成 29 年度にリハビリスタッフの増員が予定されているので、一人の患者に提供できるリハビリを充実させていきたい。（PT・OT・ST の全てが介入できる患者を増やす・患者一人当たりに提供できる単位数を増やす。）
・早期リハビリテーション並びにチーム医療の推進を目指し、「リハビリ依頼からリハビリ開始までの日数は 1.0 日未満を維持」「入院からリハ開始までの日数：6.0 日以内」「リハビリカンファレンス開催日数：年に 100 回」「週に１回のリハビリ回診実施率：100%」と目標を定めた。
・各回診への参加・学術研究・勉強会・出前講座等の講師は今までどおりに行っていく。

（文責　中村　公美）

■栄養科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主任（管理栄養士）	小俣　朋子	主査（管理栄養士）	關　恭子
上席栄養士	古郡　朝子	栄養士	大山　実希
栄養士（R）	川口　みどり		

※（R）は臨時職員

2　平成 28 年度の業務実績

（1）給食管理業務

・献立作成・発注・検収・材料仕込み・調理・盛り付け・配膳・下膳・食器洗浄の一連の給食業務は全面委託である。

・箸・スプーン及びマグカップの配膳に対し、返却数・破損状況の把握として、毎月第２土曜日の昼食後に数量を確認し定数管理を行った。

・献立会議を毎週１回開催し、検食時の所見を考慮した改善策を協議。また嗜好調査を年４回、一般食・常食喫食者を対象に実施。協議内容、調査結果を踏まえて改善策を講じ、献立に季節感を取り入れ、よりよい食事提供ができるよう努めた。

・産科食は１日３食、その他一部の食種（一般食・常食、軟飯食、全粥食、高血圧食、塩分６ｇ制限食、学童食、学食）については１日朝・夕２食を毎日選択メニューで対応し、選択メニュー加算（１食 17 円追加）を実施した。

（2）栄養管理業務

・全入院患者の栄養管理状況の把握として、栄養管理計画書の作成が必須となっているため、栄養管理計画書は毎日作成し、年間作成件数は 25,697 件となった。

・栄養サポートチーム加算の算定は７年が経過しており、当初から NST 専従職員は管理栄養士が担当している。
また、NST 回診、嚥下・口腔ケア回診、褥瘡回診にも参加（回診実績は別紙参照）し、チーム医療の活動を通して多職種との連携を強め、より患者個々に応じた食事内容、栄養計画の作成、栄養評価が可能となった。

・NST の摂食嚥下・口腔ケアチームのメンバー（耳鼻科医師、歯科医師、看護師、言語聴覚士、歯科衛生士、管理栄養士）と連携し、引き続き嚥下食形態や新しい食材の導入を検討していく予定である。

・講師依頼として、緩和ケア担当委員会の勉強会「緩和ケアにおける栄養療法と QOL」（参加者 20 名）と、褥瘡対策担当委員会の勉強会「褥瘡と栄養管理」（参加者 18 名）の実施に対し、それぞれ担当を決めて協力した。

・集団栄養指導は、腎臓病教室にて「腎臓病と食事」として年２回実施。

・個別栄養指導の業務実績は以下のとおりである。

表）個別栄養指導件数の推移と指導内容の内訳

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
個別栄養指導件数	541	696	734
栄養指導内容　内訳（件数）			
1	糖尿病及び合併症（185）	糖尿病及び合併症（264）	糖尿病及び合併症（279）
2	妊娠糖尿病（83）	妊娠糖尿病（100）	妊娠糖尿病（98）
3	ＣＫＤ及び透析（69）	ＣＫＤ及び透析（66）	ＣＫＤ及び透析（65）
4	嚥下食（35）	嚥下食（39）	嚥下食（38）
5	消化管切除術後（31）	消化管切除術後（35）	消化管切除術後（35）

＊糖尿病及び合併症にはＩ型糖尿病・糖尿病性腎症も含む。

＊その他として、胆のう炎・嚥下食・すい炎食などの件数が多かった。また、小児アレルギー食・低栄養・がんに対する栄養指導件数も上がっていた。

（３）その他の業務

・実習生として富士調理技術専門学校より２名、日本短期大学部食物栄養学科より４名、静岡県立大学食品栄養科学部栄養生命科学科より１名の実習受け入れを実施。

・市立看護専門学校１年生の栄養学（調理実習も含）の講師を担当。

３　来年度の課題

（１）NST を通じて他部門との連携を強化し、病棟訪問も視野に入れ、患者個々に応じた栄養管理の実践に努める。

（２）今後も経腸栄養剤や栄養補助食品等の見直し・検討を行い栄養管理に努めていく。

（３）栄養管理業務を実施するうえで医療に関わる一員として、学会やセミナーに参加、認定専門資格の取得・維持をすることで、より専門性を高めていくとともに、人材育成としても認定専門資格（＊）の取得を目指す。

＊認定専門資格

NST 専門療法士、TNT-D 認定管理栄養士、日本糖尿病療養指導士（CDEJ）、病態栄養認定管理栄養士、がん病態栄養専門管理栄養士　など

（文責　小俣　朋子）

■医療技術科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主査（視能訓練士）	平岩　弘子	上席歯科衛生士	北澤　美幸
上席歯科衛生士	長橋　あゆみ	上席視能訓練士	佐々木　麻理子
歯科衛生士	片瀬　未希	視能訓練士	岡野　夏菜
視能訓練士（R）	遠藤　陽子（～6月）	歯科衛生士（R）	竹川　綾香
歯科衛生士（R）	竹川　冴香	准看護師（R）	谷　真裕美

※（R）は臨時職員

2　平成28年度の業務実績

（1）視能訓練士

・外来、入院患者に対する眼科検査（表１、２参照）
・脳ドック、健康診断（表３参照）
・月、火曜日の午後、手術室にて眼科手術介助を行った

表１　（件）

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
矯正視検査	102,96	8,882	8,346
眼鏡処方		169	93
屈折検査	－	－	949
理学　弱視視能訓練	－	－	6
角膜曲率半径測定	－	1,257	1,580
角膜形状解析検査	－	5	2
中心フリッカー	－	129	165
定量色盲表検査	－	17	5
パネルD－１５	－	3	2
両眼視機能検査	144	1	177
動的量的視野検査	624	79	76
静的量的視野検査		890	1,083
網膜電位図（ＥＲＧ）	－	3	2
視覚誘発電位（ＶＥＰ）	－	1	－
眼底カメラ	－	30	38
眼底カメラ（自発蛍光撮影法）	－	21	24
眼底三次元画像解析	3,696	1,768	2,098
蛍光眼底カメラ（フルオとＩＡ）撮影	396	101	68

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
超音波検査（Aモード）	－	146	164
超音波検査（断層）	228	27	－
角膜内皮細胞顕微鏡検査	528	541	658

表２　（人）

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
ロービジョン外来	6	7	7
オルソケラトロジー	2	1	1

表３　（人）

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
脳ドックにおける眼底撮影	37	49	45
健康診断	－	89	32

・認定専門資格
　視能訓練士実習施設指導者

（２）歯科衛生士

①歯科口腔外科における外来業務

・外来診察のアシスト
・外来外科手術の介助、準備、片付け
・障害者・有病者に対する、外来歯科診療補助
・全身麻酔下における外科処置のアシスト
・全身麻酔下における障害者・有病者に対する歯科診療補助
・麻酔科診察時におけるアシスト、患者説明、検査データ確認

②口腔ケア・周術期口腔ケア

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
口腔ケア依頼件数	147	291	320
周術期口腔ケア依頼件数	18	41	185
合　　計	265	332	505

③その他

・院内講習会の講師
・富士市立看護専門学校での講師
・日本歯科衛生士会　認定歯科衛生士研修会への参加
・栄養サポートチームへの参加

（３）准看護師

①歯科口腔外科における外来業務

歯科衛生士業務内容に同じ

②点滴、それに使用する物品・薬品管理

③救急カート管理

④急変時対応

⑤硬化療法申し送り

３　来年度の課題

（１）視能訓練士

・ロービジョン情報の習得と、患者への周知を図る。

・さらなる知識、技術の向上のため、学会や研修会への積極的に参加し、認定視能訓練士資格取得を目指す。

・他の部門のスタッフとの連携を充実させ安全な医療環境を整える。

（２）歯科衛生士、（３）准看護師

・患者の訴えに傾聴し、理解しやすい説明・対応を心がける

・周術期口腔機能管理の院内周知を行い、依頼数増加を目指す

・各勉強会への積極的な参加

・人材育成として認定専門資格（＊）の取得を目指す

＊認定専門資格

在宅療養指導・口腔機能管理

（文責　平岩　弘子・北澤　美幸）

■薬剤科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
薬剤科長(兼)	井出　宣孝	副薬剤科長	落合　敏明
参事補兼主任	加藤　寛史	主任	三澤　延司
主任	渡辺　浩臣	主任	大滝　哲也
主査	川口　敬	主査	望月　保子
主査	佐藤　実香	上席薬剤師	柴田　貴子
上席薬剤師	木元　慎一郎	上席薬剤師	後藤　和美
上席薬剤師	阿部　一仁	上席薬剤師	岩本　一徳
上席薬剤師	松田　佑平	上席薬剤師	村松　香奈
薬剤師	小林　正典	薬剤師	小坂　裕介
薬剤師	木村　佳弘	薬剤師	池田　嘉隆
業務員	高橋　純子	業務員	大箸　悦子
業務員	伊東　江里	業務員	渋谷　裕子
業務員	望月　比呂子		

2　平成 28 年度の業務実績

業 務 分 類	区　分	業 務 内 容
調剤業務	外来調剤	調剤 薬剤情報提供と服薬指導 お薬手帳用ラベル提供 アレルギー副作用カードの運用（皮膚科のみ）
	入院調剤	調剤 退院時、薬剤情報とお薬手帳用ラベル提供
	注射薬調剤	緊急注射･請求伝票による払い出しと補充注射薬個別払い出し（輸液と共に） がん化学療法のレジメン・プロトコール管理、抗がん剤調製（休日含む）
製剤業務		市販されていない薬剤の製剤調製
試験業務		TDM（治療効果・副作用管理・処方設計支援）
医薬品情報業務	情報業務	医薬品情報収集・整理・配布・保管、緊急安全性情報等の院内配布、薬剤管理指導業務への支援、副作用モニタリングへの関与

業 務 分 類	区　分	業 務 内 容
薬剤管理指導業務	指導業務	入院時薬歴・相互作用チェック・持参薬の鑑別・再分包・管理・薬の説明・副作用チェック・退院時指導、医師･看護師等との打ち合わせ・カンファレンス出席
薬務業務		購入管理、在庫管理、補給管理、品質管理、麻薬管理、毒薬劇薬保管管理、薬剤委員会業務
治験管理業務		治験薬の登録・調剤・管理
その他	医薬品安全管理	院内ラウンド、リスクマネージメント他
	研修活動	院内・院外研修、学術発表他
	教育活動	薬学生実務実習受入（２名）、腎臓病教室、市内小・中・高校の職場体験
	院内活動	各種委員会への参画、ICT、NST、研修会講師

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
薬剤管理指導件数	6,483	5,754	6,187
持参薬鑑別件数	6,851	7,167	7,530
個別注射薬払い出し件数	275,952	249,773	314,463
再分包件数	1,992	2,023	2,570
ＴＤＭ	394	358	636
保険薬局からの疑義照会件数	4,082	3,548	3,572

３　来年度の課題

(1) 高カロリー輸液の調製

(2) 外来通院治療室の薬剤師専従

(3) 病棟薬剤師の１フロア３人体制

（文責　落合　敏明）

■看護部長室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副院長兼看護部長 （日本看護協会認定看護管理者）	遠藤　さよ子	副看護部長（総務担当）	伊藤　すみ子
		副看護部長（教育担当）	大石　悦子
		医療補助員	白井　美登里

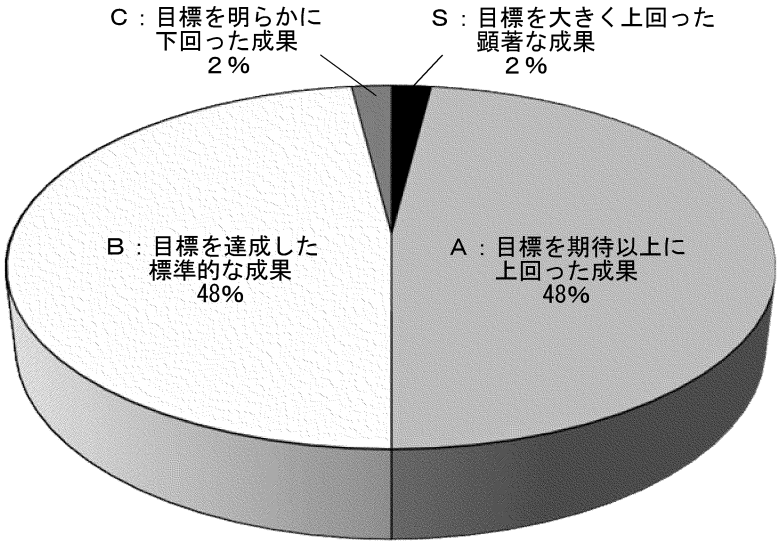
2　所属の特色

看護部長室には、副院長兼看護部長と２名の副看護部長、事務を担当している医療補助員の計４名が在籍しており、スムーズな看護部組織運営のため、副看護部長は総務担当と教育担当に業務を分担している。さらに、看護部長室は必要な情報を的確かつ迅速に看護長へ伝達するとともに、看護長からの看護部への報告も徹底され問題解決に向け対応している。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標「**療養環境を整え信頼できる看護を提供する**」

達成度評価



行動目標

1　知識・技術を深め責任ある看護を実践する

・病棟勉強会を実施し参加率は平均 70%以上であった

・病態生理を把握し看護実践に結び付けた

・勉強会を看護に活かすことができた

・各チームで研修報告会を計画的に行った
・患者参加型カンファレンスの実施（15～25 回／月、各チーム 10 件以上）
・ベットサイドカンファレンス対象者全例の実施
・リハビリ見学を看護師 199 回、患者家族カンファレンスを 51 回実施した
・毎木に NCPR シミュレーションを実施した
・急変時シミュレーションを医師とともに実施した
・出産後の電話相談を 51 件実施し、カンファレンスで情報共有と継続看護に繋げた
・昼カンファレンスや病棟カンファレンスでインシデントの共有をした
・５Ｓ活動と定期的な病棟巡回を実施し環境整備、感染防御対策を実施した
・手指衛生遵守の指導で手指消毒指数が向上した
・転倒転落の安全対策のフローチャートを作成した
・検査・治療マニュアルの見直しと新規マニュアルの作成をした
・在宅看取りを行い振り返りができた

２　丁寧な対応を実践する
・業績評価シート課業「入院患者の対応」で、接遇に関するゴールを立案した
・倫理事例検討を開催した（終末期患者の看護）
・患者の希望を聞き退院調整に繋げた
・業務委員が中心となり療養環境について検討し実践できている
・患者・家族からの「私の提案」が 147 件、92%がお褒め内容であった
・意見や苦情は速やかに上司に報告し対応した
・正しい敬語カードを活用して毎朝唱和した
・接遇５段階評価を行った
・朝の身だしなみチェックを実施した

３　多職種と連携、協働を図る
・掲示板を利用し、情報の共有を行った
・各チーム医療ラウンド時のプレゼンテーションができた
・リハビリ見学を行いリハビリスタッフとの連携が図れた
・各回診（化学療法・NST・緩和・褥瘡・リハビリ）に受持ち看護師が参加し情報共有に努めた
・各チームがカンファレンス内容を掲示板、看護連絡表等用いて共有して活用した
・ピアサポーター派遣などによりサロンの充実を図った
・がん患者サロン利用者は 24 名、ピアサポーター及び対がん協会職員 25 名であった
・多職種と連携を図り退院調整カンファレンスを１回／週実施した

４　業務実績

	で　き　ご　と
４月	昇任　副看護部長（教育担当）１名看護長３名参事２名（内認定看護師１名） 副看護長６名（内認定看護師１名）　主任 20 名　主査 15 名 ・各部署主任３名体制（業務・教育・リスク） ・人事評価制度開始 ・共立蒲原総合病院地域連携医療支援室に看護長１名出向１年延期 ・第４次採用試験（１名）
５月	・７Ｂ病棟変則交代勤務開始 ・合同会議（主任３人体制を組織の活性化、人材育成に繋げる） ・ICU　６床稼働（設備充足による）
６月	・新採用者１名辞令交付 ・市の看護師実務研修への協力（～１月） ・平成 28 年度病院事業計画のインターシップ募集開始 ・第５次採用試験（１名）
７月	・４Ｂ病棟以外の変則交代勤務試行開始（３Ｂ・３Ｃ・５Ａ・５Ｂ・６Ｂ・７Ａ・ＯＰ） ・雙葉中学職場体験（６名） ・平成 29 年度採用試験（１次募集） ・皮膚・排泄ケア認定看護師資格試験合格（吉崎美帆）
８月	・新採用者１名辞令交付 ・院内学術集会で変則交代勤務経過報告（プロジェクトチーム）　優秀賞受賞 ・高校生１日体験ナース 40 名 ・医薬学生病院見学 14 名（４Ａ・４Ｂ・６Ａ・６Ｂ・７Ａ・７Ｂ） ・インターシップ開始（７名） ・DiNQL 全項目入力開始
９月	・変則交代勤務プロジェクト解散
10 月	・平成 29 年度採用試験（２次募集 13 名） ・合同会議（人事評価と変則交代勤務の情報交換を行い共有する） ・夜間看護配置 12：1 診療報酬加算取得（様式９見直）
11 月	・電子カルテ更新のための操作練習開始 ・岩松中学職場体験（３名） ・がんセンターCN 実習受け入れ（１名）11 月 21 日～12 月 21 日

②内　　容：「手指衛生と手荒れ対策」
開 催 日：平成 29 年２月 16 日（木）
平成 29 年３月 14 日（火）
平成 29 年３月 22 日（水）
講　　師：増田　満伯、本間　功武
参加人数：458 人

（５）感染対策地域連携カンファレンスの開催【全４回実施】

平成28年度から聖隷富士病院を加えた７施設の感染防止対策加算２取得医療機関【芦川病院、川村病院、湖山リハビリテーション病院、富士脳障害研究所附属病院、富士整形外科病院、大富士病院】と連携し、感染防止技術の向上や最新知見の周知に貢献した。

①平成 28 年　５月 25 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）
②平成 28 年　８月 24 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）
③平成 28 年 11 月 30 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）
④平成 29 年　２月 22 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）

（６）感染防止対策地域連携加算を取得し共立蒲原総合病院、富士宮市立病院との相互評価を実施

①平成 28 年 12 月　６日（火）　共立蒲原総合病院の評価（富士市立中央病院が訪問）
②平成 29 年　２月　１日（水）　富士市立中央病院の評価（富士宮市立病院が来院）

（７）サーベイランスの実施

①検出菌サーベイランス【JANIS】
②SSI サーベイランス【JANIS】
③ICU サーベイランス【JANIS】
④手指衛生指数サーベイランス
⑤血流感染サーベイランス

３　来年度の課題

平成 29 年度から ICT ラウンドの判定基準を変更し、詳細に評価していく。職場の環境改善と感染防止策の遵守率向上を図り、医療関連感染の発生低減に努める。さらに、最新知見を導入したマニュアルを再考し、効率的かつ確実な感染防止策を導入する。

サーベイランスを継続し、感染症の発生やその原因菌に関するデータを継続的に収集・分析し、必要な対策を講じる。また、近隣施設からの相談等にきめ細かく応じ、地域医療の向上に貢献していく。

（文責　後藤　博一）

	で　き　ご　と
12 月	・電子カルテ更新 ・平成 29 年度採用試験（３次募集　４名） ・富士南中学職場体験（４名）
１月	・変則交代勤務体制、試行後６か月アンケート結果、４Ｂ病棟以外で本格始動 ・病棟医療事務配置（５・７階各１名）で人事課と調整、募集開始
２月	・元吉原中学職場体験（３名） ・合同会議（主任３人体制が１年経過し情報交換を行い共有する）
３月	・インターシップ（10 名）

＊富士市職員自主研究グループ活動として、12 グループが活動参加した

＊研修報告会を毎月第３火曜日　12 時 45 分～13 時まで実施し、18 名が研修報告した

＊看護部業務改善委員会における「業務成果発表」において、各部署業務改善の取り組みを発表し、実践している

＊日本看護協会資格認定制度　有資格者

・認定看護管理者

	氏　名
平成 23 年	高井　みさ子
平成 26 年	遠藤　さよ子
	田中　稔

・認定看護師

	氏　名	分　類
平成 18 年	村松　由貴子	がん化学療法看護
平成 19 年	望月　久子	手術看護
平成 22 年	若林　久美子	皮膚・排泄ケア
平成 24 年	村松　和歩	訪問看護
	加藤　美奈子	慢性呼吸器疾患看護
平成 25 年	本間　功武	感染管理
平成 26 年	佐野　世佳	集中ケア
平成 28 年	吉崎　美帆	皮膚・排泄ケア

＊院内認定看護師

	氏　名	分　類
平成 25 年	赤堀　崇代	退院調整

5　平成 29 年度の目標

「高い看護実践能力で信頼できる看護の提供」

行動目標：１．知識・技術を深め質の高い看護を実践する

２．丁寧な対応を実践する

３．多職種と連携し退院支援の充実を図る

（文責　遠藤　さよ子）

■外来

1　スタッフ

役　　職	氏　　名	役　　職	氏　　名
看護長	北島　美鈴	参事兼副看護長	田中　慶子
参事兼副看護長	佐野　まり子	参事兼副看護長	白戸　幸子
参事兼副看護長	後藤　光子	副看護長	中村　三千代
副看護長	田島　眞弓	副看護長	滝澤　佐織
副看護長	藤田　久美子	副看護長（認定）	村松　由貴子
副看護長（認定）	若林　久美子	主任	望月　敦子
主任	若本　奈緒美	主任	久保田　京子
主任	勝亦　由美	看護師	76 名
准看護師	６名	医療補助員	47 名

2　所属の特色

当院の外来は23科の一般外来と、内視鏡・放射線科・救急外来で形成されている。内視鏡、放射線科は予定の検査・治療と緊急時に対応できる看護体制となっている。内視鏡検査・治療4,944件、放射線科では心臓カテーテル検査・治療1,267件、その他血管造影214件を行った。救急外来では、地域の二次、三次救急を24時間体制で受け入れている。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標：安心して受診できる外来環境を整え、信頼ある看護を提供する

評価：１）外来全体会で接遇の５段階評価結果を発表し、待ち時間の長い患者への対応について重要性を認識し実践に繋げた

２）各科の専門性を理解し、各チーム間で連携・協力できることを意識して活動した

4　業務実績

・７月から泌尿器科外来が２診体制となり、膀胱鏡検査103件、前立腺生検40件増加した。

・小児科外来では、乳児健診を集団健診から外来での個別健診とし、プライバシーの保護と感染面を考慮し環境を整えた。

・地震発生時の初期行動について、シミュレーションを実施し共通認識した。

・外来全体会で手指衛生について勉強会を実施し、感染対策の意識向上となった。

5　平成 29 年度の目標

知識・技術を向上させ、外来看護の充実を図る

１）病棟・外来・地域との連携を図り、継続看護を実施する

２）明るい挨拶と、丁寧な対応をこころがける

３）多職種と連携し、在宅療養の支援に努める　　（文責　北島　美鈴）

■在宅療養支援グループ

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	齋藤　幸子	主任（院内認定）	赤堀　崇代
副看護長	渡邉　裕子	主査	加藤　浩子
参事兼副看護長(認定)	村松　和歩	主査	中野　友美
上席看護師	高澤　美代	臨時看護師	佐藤　美智子

2　所属の特色

在宅療養支援グループは、総合相談センターと退院調整・訪問看護を担当している。総合相談センターでは、患者・家族が安心して療養生活（在宅・入院を問わず）を過ごせるように、不安や疑問に対して看護師の専門性を活かし相談に応じている。

退院調整・訪問看護においては、訪問看護認定看護師を中心に退院支援および訪問看護サービスを行っており、「より身近に、より的確に、より優しい看護を提供します」を理念に在宅療養移行支援を実践している。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標：「院内外の他職種と協働し、患者・家族が主体となる支援を実践する」

1）相談しやすい場の提供と患者目線での対応をする。

2）患者・家族の意向に寄り添った退院支援を実践する。

3）患者・家族の思いを大切にできるように在宅看護を実践する

評価：1）相談員としてのスキルアップに努めると共に総合相談センターの活用を促した

2）退院支援部門の人材の充実とシステムの構築により退院支援加算 1 が 1,042 件／年　算定できるまでに整備した。

3）研修参加や日々のディスカッションで看護実践を振り返りケアの方向性を明確にして、より良い在宅看護に努めた

4　業務実績

1）毎週 1 回総合相談カンファレンスと病棟巡回を実施した。総面談件数は 8,520 件(看護相談 157 件、苦情 148 件)であった

2）各病棟毎週 1 回の定期的な退院調整カンファレンスと毎月 1 回の退院支援カンファレンスを実施した。退院調整のべ数 1,686 件であった

3）訪問患者実施数 55 名、のべ訪問回数 1,388 回であった

5　平成 29 年度の目標

目標：「院内外の他職種と連携し患者家族に専門性を活かした看護を提供する」

1）患者・家族の思いを大切にし QOL を向上できるように在宅看護を実践する

2）患者・家族の意向に寄り添った退院支援を実践する

3）相談は、患者・家族の思いを大切にした対応をする

（文責　渡辺　野利江）

■手術室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	小林　由美	副看護長	石川　裕子
副看護長（認定）	望月　久子	主任	伊藤　輝美
主任	杉本　祐介	主任	佐野　陽子
主査	６名	看護師	19 名
委託（ダスキン）	５名		

2　所属の特色

当院手術室は、12 科の手術を、看護師数 31 名（認定看護師１名含む）で、外来手術を含め年間約 3,800 件以上行なっている。手術件数の増加、効率性を求められる中、２交代勤務を導入することで夜間の緊急手術にも対応し、安全な手術看護を提供している。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標：手術環境を整え患者に寄り添った看護の提供をする

１）患者に寄り添った看護提供ができるよう手術室内の体制を改善する

２）他職種を含めた業務改善をする

評価：１）看護師の勤務体制を二交代勤務に変更し、より多くの手術を実施した

２）ピッキングを業者委託し、準備時間の短縮をすることができた

4　業務実績

１）手術物品をキット化し、作業能率を向上した

２）電子カルテ更新に伴い手術使用物品詳細リストの変更をした

３）特殊手術カンファレンスを３例実施することができた

４）手術管理科・麻酔科・手術室　月１回会議を開催した

5　平成 29 年度の目標

基幹病院手術室の役割を果たすべく、安全かつ円滑に手術を行える体制を整備する

１）手術室退室時間が 17 時を超える症例を 10%以下にする

２）月間手術室運用を 300 件以上にする

３）専門的知識技術を深めるため、年間 10 回の勉強会を開催する

（文責　小林　由美）

■中央材料室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長（ＯＰ室･中材兼任）	小林　由美	主査	山本　栄理子
委託（ダスキンマネジャー）	山岡　隆志	委託（ダスキン）	９名

2　所属の特色

中央材料室は、患者に安全な滅菌医材を提供するため、委託業者と協力し、院内で使用する医材の滅菌業務（オートクレーブ・EOG・プラズマ）と病棟の検体や医材、伝票類，薬剤等の搬送業務を行っている。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標　患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

１）滅菌医材の質保証を保つ

２）委託者とのコミュニケーションを図りリスクを共有する

３）防災対策を進め災害に備える

評価　１）３月末の洗浄機、乾燥機更新に伴い、マニュアル作成と勉強会を行なった。作業時間が短縮及び全体業務の効率化につながった。プラズマ・高圧蒸気などの滅菌機や医材の経年劣化が目立ち修理対応や不良医材のメンテナンスに重点を置き対応、現場での使用に支障のないように努めた

２）毎水曜日に昼のカンファレンスを行い、リスク事例から業務改善に繋げた

３）防災用品の日切れ対策として、毎年９月に全品の滅菌を行うようにした。衛生材料はできるだけ既製品化していく方向で検討する

4　業務実績

１）手作り衛生材料の、外科ガーゼ・圧定・枕ガーゼの削減を行い、既製品化を行った

２）更新された洗浄機、乾燥機の業務マニュアルを作成し、業務改善を行った

5　平成 29 年度の目標

患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め滅菌の質保証を高める

２）委託者との連携により、業務の効率化を図る

３）災害に備え、防災物品の管理を行う

（文責　小林　由美）

■ＩＣＵ（集中治療室）

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	植松　和子	副看護長	渡邉　かおる
主任	小林　宏美	主任	平元　いずみ
主任	渡邉　葉子	看護師	17 名
医療補助員	１名		

2　所属の特色

平成 28 年５月より６床稼働となり、平成 28 年度の延患者数 2,130 名、病床稼働率 89.5%、病床利用率 71.9%であった。科別では、循環器科（心臓血管外科を含む）161 名、外科 118 名、脳神経外科 65 名、内科 23 名、整形外科５名、泌尿器科３名、産婦人科２名、歯科口腔外科１名、小児科１名であった。看護体制はモジュール型継続受け持ち方式で、他部門と連携・協働し、責任をもって看護を行っている。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標「集中治療を受ける患者・家族の環境を整え、責任ある看護を実践する」

行動目標　１）高度医療に対応した知識・技術を深め、マニュアルを遵守する

２）思いやりのある態度とわかりやすい言葉で対応する

３）疾患に応じた合同カンファレンスを開催し、連携・協働を図る

評価

１）ICU 処置手順を修正し、カンファレンスで共有した。また、勉強会を８回実施し、アセスメント能力の向上を図り、看護に活かすことができた

２）接遇８か条、丁寧語の読み合わせを行い、患者・家族への対応に活かした

３）医師、手術室看護師、病棟看護師、臨床工学技士、リハビリスタッフ、薬剤師等、多職種とのカンファレンスを開催し実践に活かした

4　業務実績

１）心臓血管外科術前カンファレンス 40 件、その他合同カンファレンス９件、終末期ケアカンファレンス１件、褥瘡カンファレンス２件実施した

２）勉強会を８回実施した

３）看護研究に取り組み、日本看護学会で成果を発表し論文採択された

5　平成 29 年度の目標

目標「高度医療に対応できる能力を備え、安心・安全な看護を提供する」

行動目標

１）高度医療に対応したアセスメント能力を向上するために、知識・技術を深める

２）患者・家族の声を傾聴し、思いやりのある態度とわかりやすい言葉で対応する

３）退院支援カンファレンスを実施し、病棟との連携を密にする

（文責　齋藤　幸子）

■３Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	今野　美枝子	副看護長	小野田　智恵子
主任	村田　弘子	主任	渡辺　まゆみ
主任	尾崎　悦子	主査	３名
看護師	25 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

３Ｂ病棟は、脳神経外科・泌尿器科・整形外科 51 床と、感染病床６床を併設している。病気や障害と共に生きる患者･家族の思いに寄り添い、丁寧で優しい対応、安全で確実な看護、患者の自立支援に努めている。患者・家族と共にカンファレンスを行い、安心して入院生活が送れるよう配慮している。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標「安全な療養環境を整え、患者・家族に寄り添った看護を提供する」

１）病棟の専門性を理解し、知識・技術を向上させる

各チーム年２回以上勉強会を主体的に行い、脳外科・泌尿器科領域における知識の向上に努めた

２）患者・家族の思いに寄り添い、責任を持って看護を実践する

看護師全員が１回以上患者とのカンファレンスを実施でき、看護計画に反映し実践できた。患者・家族からも感謝の言葉が聞かれ、好評を得た

３）患者・家族がチームの中心となるよう、多職種の中でリーダーシップを発揮する

緩和・NST・褥瘡回診・各科の Dr.カンファレンス・退院調整など、意識して参加出来るようになり、リーダーシップを発揮できた

４　業務実績

１）患者家族と共にカンファレンスを行った（年 30 例以上）

２）介助食の見直し・実践・評価

３）新人教育・学生指導者が月１回話し合いの場を持ち、指導に臨んだ

４）ケーススタディ「高次脳機能障害について」「手術予後に関する患者の不安について」「せん妄予防ついて」

５）日本看護協会管理学会発表「せん妄に対する看護師への教育的介入の効果」

５　平成 29 年度の目標

「個々の看護実践能力を高め、患者・家族の思いに寄り添った看護を提供する」

（文責　大塚　君子）

■４Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	水野　博代	副看護長	鈴木　早苗
主任	大井　洋子	主任	菅原　早苗
主任	小澤　花子	主査（看護師）	３名
主査（助産師）	４名	看護師	７名
助産師	９名	看護師（臨時）	１名
医療補助員	３名		

２　所属の特色

４Ａ病棟は、産科病棟であり、妊娠・分娩・産褥の患者さんが入院している。ベッド数は 32 床で、その他陣痛室・分娩室・新生児室がある。スタッフは、患者一人ひとりを大切にした優しい看護の提供に努めている。

妊婦自身が、妊娠期間を快適に過ごせ主体的に分娩に臨めるよう「ファミリークラス」を毎月開催している。また「助産ケアルーム」では、妊婦の心配事や相談に随時対応している。分娩時は、産婦のバースプランに基づき、ニーズに沿ったお産となるよう努めている。産後は、バースレビューやクリニカルパスに沿って褥婦の育児支援を行い、必要時は、フィランセやこども家庭課等との連携を図り、退院後も継続して母子支援を行っている。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標「安全・安全な療養環境を整え、思いやりのある医療を提供する」

・専門的な知識・技術を高め責任ある医療を提供する
・明るい笑顔と丁寧な対応に心がける
・関連部署との連携を密にする

評価

・勉強会の開催、事例検討会、NCPR シミュレーション等を実施することで知識・技術の向上に繋げる事ができた
・接遇に留意し、患者・家族に寄り添った看護ケアの提供に努めた
・看護連絡表・退院時連絡表を活用し、外来や地域との連携を図った

４　業務実績

・周産期カンファレンスを毎週木曜日に行い、安心・安全な医療の提供に繋げることができた
・２名の NCPR インストラクターが主体となり、毎週木曜日にシミュレーションを行った。９月に NCPR　Ａコースを開催し、５名が受講した

５　平成 29 年度の目標

「患者・家族に信頼されるよう専門性のある医療を提供する」

（文責　鈴木　早苗）

■４Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	森本　康江	副看護長	東川　真理
主任	羽二生　朱美	主任	西﨑　金苗
主任	望月　真理	主査	７名
看護師	33 名	医療補助員	３名

２　所属の特色

４Ｂ病棟は、新生児から 15 歳までの小児が入院している。小児科をはじめ、耳鼻咽喉科・外科・脳外科・整形外科・形成外科などあらゆる科の小児が入院する。

ベッド数は、NICU（新生児特定集中治療室）10 床を含む 44 床である。NICU は、富士医療圏のハイリスク新生児を受け入れ、高度医療・看護を提供している。

病棟理念は「一人ひとりに丁寧な対応を心がけ、コミュニケーションを大切にした医療・看護を提供する」であり、患児・家族が安心して入院できる環境を整えている。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標：１）自己啓発と継続学習に努め、根拠ある医療・看護を提供する

２）安心した療養生活がおくれるよう患者･家族に寄り添った看護を提供する

３）お互いを尊重し、働きやすい職場環境を整える

評価：１）勉強会を月１回、週１回の医師とケースカンファレンスを行い、治療に関する情報交換と医師による勉強会も兼ね、知識を深め、看護に活かすことができた。NICU では、愛育病院、静岡県立こども病院の GCU,NICU の研修に３名が参加した結果、高度医療の知識と技術の習得ができた。急変時対応シミュレーションを週１回行い、スタッフ全員が年３回以上は実施し、知識・技術の向上に繋がった

２）NICU においては、母子分離になるため入院時オリエンテーションの対応で両親の気持ちを汲み取り、丁寧に行った。さらに面会時に一日の様子を説明することや、初回沐浴後の記念写真を添付した交換ノートを活用することで母親の不安軽減に努めた結果、お褒めの言葉を頂く件数が増えた。一般病棟においても付き添い者の気持ちに寄り添い、個別の対応をすることでご家族が安心して医療と看護を受けることができた

３）カンファレンスにおいて相手の意見を聴く姿勢を学び、更にコミュニケーション意見交換が活発に行われた

4　業務実績

NICU チームと一般病棟チームの看護師が入院する全ての患児に安全に看護を提供するために、知識・技術の情報共有と統一に取り組んだ。各チームの特徴的な技術・看護についてマニュアルを作成し、伝達講習を行ない、知識・技術の向上に繋がった。NICU では、面会時間の活用について検討し、入院中から退院後まで御家族の不安が軽減されるよう面会用紙を作成し、一人ひとりに合わせた継続看護に活かすことができた。愛育病院、静岡県立こども病院 GCU,NICU 研修後の伝達講習を企画した。ご意見用紙を改善した結果、222 通の御意見を頂き、そのうち 93%がお褒めの内容であり、7％がお叱りの内容であった。提案して頂いたご意見に対して速やかにカンファレンスをもち、対応を検討し実践につなげた。

5　平成 29 年度の目標

・患者・家族が安心できる専門性の高い小児看護を実践する

1）根拠ある医療・看護の提供をするために自己啓発に努める

2）丁寧な対応を実践する

3）患者・家族に信頼される責任ある看護を提供する

（文責　森本　康江）

■５Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	勝又　千壽子	副看護長	秋山　ゆかり
主任	加藤　珠永	主任	小林　二十美
主任	田中　秀樹	主査	６名
看護師	21 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

５Ａ病棟は耳鼻咽喉科・歯科口腔外科・婦人科・外科・内科の混合病棟である。患者・家族参加型カンファレンスを行ない、患者一人ひとりの思いに寄り添う看護を提供している。スタッフはよく声をかけ合い働きやすい職場である。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標「カンファレンスを充実させ患者・家族の思いに沿った医療・看護を提供する」

１）各科ファイルを活用し知識技術を深め安全な医療・看護を提供する

２）患者・家族参加型カンファレンスを定着させ、患者・家族にわかりやすい医療・看護を実践する

３）他部門とのカンファレンス充実を図り他職種と協力してチーム医療に取り組む

様々な疾患の患者に対して、各科ファイルを活用し基準に則って安全に対応した患者・家族の思いや希望を確認し、共に看護計画を立案、実施した。退院調整シートを作成し他部門・他職種との情報共有に活用し計画的に退院支援を行った。

４　業務実績

１）患者・家族参加型カンファレンス：治療への不安、退院調整など 673 件／年

２）倫理カンファレンス：がんターミナル患者の「家に帰りたい」希望を支えるケア、患者・家族それぞれの主張が異なる場合の対応、抑制しないケアなど７件

３）病棟勉強会：退院支援と MSW、婦人科化学療法、顎骨骨折、糖尿病など６件

４）業務改善：動線を考えた作業環境の改善、退院調整シート作成と活用、変則交代制導入に伴う業務整理

５）ケーススタディ：家族と共に行う認知症ケア、化学療法患者への精神的ケア、慢性疼痛に対する音楽療法

５　平成 29 年度の目標

「個々の実践能力を高めチーム力を強化し患者・家族に寄り添った看護を提供する」

１）専門的知識・技術を高め、看護師間のコミュニケーションを密にして、安全で安心な看護を実践する

２）医療と看護の振り返りを行い、患者・家族を尊重した看護を実践する

３）入院早期から多職種と連携して計画的に退院支援を行う

（文責　勝又　千壽子）

■５Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	松山　早登美	副看護長	柘植　範子
主任	遠藤　喜巳子	主任	前島　良子
主任	諸星　宮子	主査	３名
看護師	24 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

５Ｂ病棟は、ベッド数が 56 床の外科病棟である。患者の多くは、消化器がんや乳がんなどの手術ほか、検査や化学療法などの短期入院、緩和ケアを目的にて入院している。そのため看護師には、周手術期の看護をはじめ、化学療法や緩和ケアなど多くの専門的な知識や技術が求められ、勉強会の実施にて専門知識を深め看護の質の向上を目指している。また、多くのクリニカルパスを使用し、患者や家族が安心で安全な入院生活を送ることが出来るように努めている。

３　平成 28 年度の病棟目標及び評価

「専門職としての知識・技術・態度で対応する」

１）責任ある医療と看護を提供する

大腸がん・口腔ケアなど病棟勉強会を８回／年実施し、知識・技術の向上に努めた

２）倫理的配慮で対応する

倫理事例検討を６回／年実施した。また、各自が接遇に関する目標を立案し達成に向けて行動した

３）医療チームと連携・調整・協働する

受け持ち看護師が早期から患者・家族と関わり、医療チームと情報を共有するなどの連携や調整を行い、在院日数の短縮に努めた

４　業務実績

急性期看護「認知力の低下がある高齢患者へのストーマセルフケア支援」と、看護教育「卒後２年目を目前にした新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援」の看護学会発表を行うことができた。また、業務改善・調整を行い７月より変則２交代制勤務を開始した。

５　平成 29 年度の目標

「知識・技術を深め安全・安楽・個別性のある看護を提供する」

１）知識・技術を深め根拠に基づいた看護を提供する

２）患者に合わせた細やかな気配りを行う

３）多職種と協働し継続した看護を提供する

（文責　松山　早登美）

■６Ａ病棟

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	大塚　君子	副看護長	遠藤　里花
主任	渡辺　明子	主任	河合　利枝
主任	木野村　信子	主査	７名
看護師	20 名	医療補助員	５名

2　所属の特色

６Ａ病棟は、ベッド数 50 床の内科病棟で、主に、血液疾患・代謝系疾患の方が入院されている病棟である。血液疾患治療の為、無菌室 2 床が設置されており、化学療法とその看護に対応している。糖尿病患者に対しては、糖尿病療養指導士と共に教育プログラムに則り正しい知識の習得と自己管理をサポートしている。今年度は、「看護実践能力を高め、信頼される看護を提供する」を目標に、知識・技術を深める共に、倫理面にも配慮しながら患者・家族の思いに添った関わりを大切にすることで、６Ａ病棟に入院して良かったと思われる看護を目指している。

3　平成 28 年度の目標及び評価

目標「安心・安全な療養環境を提供し、患者・家族の思いを大切にした看護を実践する」

行動目標

１）倫理的感性を高め、思いやりのある看護が提供できる

２）知識・技術の向上に努め、専門性のある質の高い看護に繋げる

評価

１）倫理に関するカンファレンスを定期的に実施することができ、定着してきた

２）月１回の勉強会の年間計画を立案し実施することができた。知識を深めることで観察すべき点が明確となり、異常の早期発見へと繋げることができた

4　業務実績

病棟勉強会：食事介助：言語聴覚士　口腔ケア：歯科衛生士　白血病について：血液内科医師　化学療法、インスリンについて：薬剤師　せん妄について：認知症ケア専門士　多重課題に対するシミュレーション：病棟リスク委員　　糖尿病：代謝内科医師　悪性リンパ腫：血液内科医師　視神経脊髄炎：神経内科医師　糖尿病の食事・運動療法：代謝内科医師

業務成果発表：衛生的で使いやすいトイレと汚物室の改善

5　平成 29 年度の目標

目標：看護実践能力を高め、信頼される看護を提供する

行動目標

１）専門性のある質の高い看護を提供する

２）倫理面に配慮した接遇を実践する

３）多職種と協働し退院後を見据えた責任ある退院支援を実践する

（文責　遠藤　里花）

■６Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	齋藤　正美	副看護長	白井　さつき
主任	山中　祐子	主任	笹木　一美
主任	齋藤　薫美	主査	２名
看護師	28 名	医療補助員	６名

２　所属の特色

６Ｂ病棟は、呼吸器内科・腎臓内科病棟で、ベッド数は 56 床、誤嚥性肺炎・慢性呼吸器疾患・慢性腎臓病などの患者が入院する。人工呼吸器管理や在宅酸素導入・血液透析患者に対して専門的知識・技術が求められる。そのため、安全な医療・看護を提供できるように勉強会や研修に参加している。患者・家族の気持ちに寄り添い一人ひとり丁寧な対応を心掛けている。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標「患者・家族の思いを大切にし、安全な医療・看護を提供する」

行動目標　１）安心して入院・治療が出来る環境を整える
　　２）患者・家族に丁寧な対応と言葉がけを行う
　　３）チーム医療の一員として、医療・看護の専門性を発揮する

評価　１）ウォーキングカンファレンスを実施し、患者・家族の意向を共有したことで安心・安全な療養環境を提供できた
　　２）Dr・患者カンファレンスを実施し、個別性のある看護ケアの実践ができた。倫理・デスカンファレンスで看護の振り返りを行い、倫理感性を高めた
　　３）院内外の研修に自主的に参加し自己学習に努めた。また、計画的な病棟勉強会を実施したことで、知識の向上に繋がり看護実践に活かすことができた。多職種と連携を図り、患者の希望を聴き具体的な退院調整に繋ぐことができた

４　業務実績

１）病棟内５Ｓ活動、病棟巡回４回／年、変則２交代制導入による業務改善
２）事例検討：倫理・デスカンファレンス（各４回／年）
３）病棟勉強会：血液透析・腹膜透析・肺炎・体位ドレナージ法など 12 回／年、
　　地震時の初期行動訓練２回／年、救急蘇生シミュレーション６回／年
４）ケーススタディ：放射線皮膚炎の予防とセルフケア指導、高齢夫婦への NIPPV 療法指導、在宅に向けての援助、血液透析導入前の患者の自己管理指導

５　平成 29 年度の目標

目標「専門的な知識を深め、安全で安心できる医療・看護を提供する」

行動目標　１）知識・技術を深め、責任ある看護を実践する
　　２）患者・家族の思いを傾聴し、一人ひとりを大切にした対応をする
　　３）多職種と協働し、早期からの退院調整を図る

（文責　齋藤　正美）

■７Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	勝山　弘子	副看護長	芳野　由規子
主任	齋藤　カトミ	主任	田中　圭子
主任	本多　すみ江	主査	４名
看護師	23 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

７Ａ病棟は、循環器内科・心臓血管外科 42 床、結核病棟 10 床の病棟である。１年間で約 1,000 件の心臓カテーテル検査・治療が行われ、緊急時には 24 時間体制での治療も行われている。そこで私達は専門的知識に基づいた看護を実践するために、定期的な勉強会、研修に参加している。そこで得た知識・技術を活かし患者・家族に信頼される医療が提供できるよう日々、努めている。

３　平成 28 年度の目標及び評価

「循環器・結核病棟の専門性を深め、患者・家族に信頼される医療を提供する」

１）院内外の研修参加は平均 7.8 回／年だった。病棟勉強会は 10 回／年開催され、一人１回以上参加し、平均は 5.0 回/年だった。

２）入院患者からの「私の提案」投稿数 147 件の内「おほめ」は 92%だった。医師、看護師とも「丁寧で分かりやすい説明」等具体的な内容もあった。

３）多職種とのカンファレンスは６回／週行われた。患者の急変や緊急カテ、入院以外は実施できた。

４　実務実績

・４月より、医療補助員が、１名増員になり、業務整理をすることにより清潔ケア、環境整備への充実へと繋がった。

・７月より、変則２交代勤務を導入した。年休収得日数の増加し、日勤深夜入りが廃止された。

・スタッフ１名が皮膚・排泄ケア認定看護師の資格を習得した。

５　平成 29 年度の目標

「チーム医療を充実させ、患者・家族に信頼される医療を提供する」

１）院内外の研修を一人５回／年、院外の研修２回／年参加し、実践に役立てる

２）患者の言葉を傾聴し、丁寧な対応を心がける

３）多職種と連携し、患者カンファレンスを充実させる（６回／週）

（文責　勝山　弘子）

■７Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	高井　みさ子（※）	副看護長	勝又　祐子
主任	戸塚　美晴	主任	渡邉　志津子
主任	冨永　美保	主査	４名
看護師	23 名	医療補助	５名

（※）は日本看護協会認定看護管理者

２　所属の特色

７Ｂ病棟は消化器内科病棟で主に肝臓や胆道系の疾患、胃・腸・膵臓などの消化器疾患の患者が入院する。病棟には検査室があり肝生検やラジオ波（RFA）を消化器内科医師が実施し、病棟看護師が介助についている。また、入院患者の緊急内視鏡の介助も実施している。今年度は肝生検 30 件、RFA は 34 件、緊急内視鏡 36 件を実施した。看護体制は固定チームナーシングで、患者の気持ちに寄り添い、きめ細かな対応で最善の看護を提供するために医師と共に医療・看護に努めている。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標「安心して医療が受けられる病棟環境を整え、患者・家族の思いを尊重したチーム医療を提供する」

１）消化器内科の知識・技術・設備を整え、安全な医療を提供する
勉強会や内視鏡研修を実施し、知識技術の向上に努め検査室の設備やマニュアルを整えることで安全な医療の実践に繋げることができた

２）患者・家族の希望に添い、信頼関係を築く
看護師、医師と情報を共有し患者家族と信頼関係を築くことができるよう意識的に関った

３）医療チームの一員として多職種と情報を共有し連携を図る
チーム医療に積極的に関り、多職種と情報共有、連携を図ることができた

４　業務実績

１）病棟勉強会：緊急内視鏡研修を含め 12 回実施
２）業務改善：検査室の環境整備と RFA 専用ベッドのシミュレーションを実施

５　平成 29 年度の目標

病棟目標　患者・家族に安心感を与える医療を提供するために、専門的な知識・技術の向上に努める

行動目標　１）消化器内科の知識・技術を深め、責任ある医療・看護の提供をする
２）患者・家族の思いに寄り添い、丁寧な対応を実践する
３）多職種と連携し早期退院支援の充実を図る

（文責　植松　和子）

■３Ｃ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	野澤　里美	副看護長	齋藤　洋実
主任	鈴木　裕子	主任	金森　清美
主任	渡邊　弘江	主査	３名
看護師	24 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

３Ｃ病棟は、整形外科・形成外科・眼科・皮膚科の混合病棟である。高齢化に伴い、大腿骨頸部骨折や白内障の患者が多く入院している。ほぼ全員の患者にクリニカルパスを使用し、診察、看護及び自立への援助などを計画的に行っている。

移動に介助を必要としている患者が約90％を占めているため、転倒・転落などリスク対策に力を入れ、安全な入院生活が送れるように努めている。また、大腿骨地域連携パスを使用して地域と連携し、スムーズな転院を目指している。

３　平成 28 年度の目標及び評価

目標「患者・家族に安心で安全な医療と専門性の高い医療の提供」

１）患者・家族を尊重した丁寧な言葉遣い、態度で対応する

患者参加型カンファレンスやウォーキングカンファレンスを基準に沿って実施し、わかりやすい説明や温かい丁寧な対応・声かけを行った。患者の想いに沿ったケアや退院支援につなげた。

２）知識・技術を高め、信頼される医療を提供する

院内外の研修会に自主的に参加し自己学習に努めた。また病棟の専門性に特化した勉強会を月に一度実施し、知識・技術の向上を図り、周術期の看護実践や退院支援に活かした。

４　業務実績

１）患者参加型カンファレンスを年間 178 件実施した

２）ワークライフバランスの取り組みとして変則二交替制勤務を導入し、業務改善を行った

３）日本クリニカルパス学会学術集会で「バリアンス分析を利用した下肢壊疽（腰椎麻酔）パスの検証と改善」のテーマで発表した

５　平成 29 年度の目標

「他部門との連携を強化し、信頼される医療を提供する」

１）患者・家族の背景を理解し、良好な関係を築く

２）多職種と情報を共有し、安全な医療を提供する

３）知識・技術を高め、専門性を発揮する

（文責　野澤　里美）

■病院経営課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
事務部長	杉沢　利次	課長	芹澤　広樹
経営企画担当調整主幹	玉舟　正弥	経営企画担当統括主幹	北原　正基
経理情報担当統括主幹	金子　弘之	経営企画担当主幹	木内　啓人
経理情報担当主幹	宇佐美　雄二	上席主事	角入　あゆ美
上席主事	木ノ内　宏治	主事	杉山　裕亮
主事	清水　涼真	医療人材室長（R）	佐野　光信
事務補助員（R）	小峠　加代子	事務補助員（R）	志田　奈穂子

（R）は臨時職員

2　平成 28 年度の業務実績

＜業務＞

病院経営課は「病院経営の健全化を推進するため、経営分析及び経営改善を行う」、「病院の機能改善を推進するため、各種施策の企画立案と調整、病院職員の適正配置を行う」、「病院事業の予算を編成、執行を管理し、決算の調製を行い、資金計画を策定し管理する」及び「医療情報システムの管理運用を行い、病院の IT 化を推進する」の主要事業があり、以下の 7 事業を所管している。

（1）中央病院経営健全化推進事業　（2）中央病院機能改善推進事業
（3）中央病院予算編成執行・会計決算調製事業　（4）中央病院会計出納管理事業
（5）中央病院情報システム管理事業　（6）中央病院 IT 化推進事業
（7）部内調整事業

＜実績＞

経営企画担当では、経営改革推進委員会の事務局として、新公立病院改革プランの策定を行うとともに、第二次中期経営改善計画の実効性を高めるため、平成 28 年度事業計画書を策定し、各項目に対する具体的な取組内容を院内周知するとともに進捗管理を行った。

また、地域がん診療病院の指定に向けて、関連する委員会や部署とのヒアリングを通じて、がん診療体制の更なる充実を図った。

経理情報担当では、平成 27 年度決算書及び平成 29 年度予算書を調製するとともに、平成 28 年 12 月に電子カルテシステムの更新を行った。

3　来年度の課題

経営企画担当では、新公立病院改革プラン並びに第二次中期経営改善計画の事業計画の進行管理に取り組むとともに、新規事業に関する院内調整を図る。また、老朽化が進む病院施設の建替えに向けた検討を始める。

経理情報担当では、予算・決算の調整を行うとともに、予算の適正な執行管理を行う。

（文責　芹澤　広樹）

■病院総務課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	白川　安俊	総務担当統括主幹	深澤　公保
人事担当統括主幹	鈴木　裕子	施設物品担当統括主幹	中川　貴裕
総務担当主幹	秋山　英希	人事担当主幹	高橋　克典
施設物品担当主幹	仲澤　実加	主査	佐野　昌哉
主査	宇佐美　友紀	上席主事	井出　大介
主事	加瀬　真己子	主事	佐山　侑希
主事	青木　孝介	業務員（R）	秋山　功
業務員（R）	加藤　猛	事務補助員（R）	松井　みゆき
事務補助員（R）	佐野　友理子	事務補助員（R）	坪井　美千代

（R）は臨時職員

2　平成 28 年度の業務実績

病院総務課の業務は、病院運営を円滑に進めるための管理事業を主な事業としている。総務担当、人事担当、施設物品担当の３担当を構成し、総務担当は病院全体の庶務・開設許可事項等の許認可申請、人事担当は人事・福利厚生関係、施設物品担当は施設整備や物品購入を主な業務としており、以下の 13 事業を所管している。

（１）中央病院運営事業　（２）中央病院事務管理事業
（３）中央病院人材活用事業　（４）中央病院勤務条件整備事業
（５）中央病院給与支給事務事業　（６）中央病院職員福利厚生事業
（７）中央病院安全衛生管理事業　（８）中央病院職員研修事業
（９）中央病院市有財産管理事業　(10) 中央病院環境整備事業
(11) 中央病院院内保育所運営事業　(12) 中央病院施設管理事業
(13) 中央病院防災対策事業

3　来年度の課題

引き続き、医師をはじめとした医療従事者の確保に取り組むとともに、高度で専門的な医療を提供するため、職員の人材育成に努めていく。

施設・設備に関しては、老朽化が進行する中、高度医療機器を適切・効率的に整備し、高度で安全安心な医療を継続して提供するため、平成 28 年 12 月に設置された医療機器等長期整備計画検討委員会と情報共有し、効率的な運用管理に努める。

災害対策事業は、災害拠点病院としての基盤強化を目的に、事業継続計画（BCP）の策定、富士市地域防災計画及び富士市立中央病院地震防災計画に基づく訓練の実施、災害対策用設備及び資機材等の配備を計画的に進めていく。

（文責　渡辺　利英）

■医事課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	森　育洋	看護長兼地域連携室	齋藤　幸子
統括主幹	寺田　和子	副看護長	渡邉　裕子
主査	前嶋　健二	地域連携室統括主幹	岩垣　哲也
主査	岡本　功	主幹（MSW）	江村　宏子
主査（診療情報管理士）	島田　英介	主幹	小林　真紀子
上席主事(診療情報管理士)	齋藤　智恵美	主査（MSW）	佐藤　理絵
主事	杉山　彩	上席主事（MSW）	遠藤　卓馬
主事(診療情報管理士)	佐野　元美	事務補助員（R）	遠藤　京子
主事補	川口　愛美	事務補助員（R）	菅野　美華
事務補助員（R）	及川　智子	事務補助員（R）	柴﨑　香苗
通訳（R）	鈴木　智美	渉外室長（R）	加藤　裕司
渉外担当（R）	望月　加津典	医師事務作業補助者（R）	芦澤　典子
医師事務作業補助者（R）	生駒　久美子	医師事務作業補助者（R）	太田　智子
医師事務作業補助者（R）	勝又　好恵	医師事務作業補助者（R）	菊地　美穂
医師事務作業補助者（R）	佐野　秀美	医師事務作業補助者（R）	佐野　由美子
医師事務作業補助者（R）	清水　みどり	医師事務作業補助者（R）	髙室　まゆみ
医師事務作業補助者（R）	槌屋　有希	医師事務作業補助者（R）	古郡　直美
医師事務作業補助者（R）	宮田　由香	医師事務作業補助者（R）	望月　美佐
医師事務作業補助者（R）	望月　美咲	診療録管理事業（R）	阿倉　ゆかり
診療録管理事業（R）	大川　由梨香	診療録管理事業（R）	小林　朱美
診療録管理事業（R）	西川　麻衣	診療録管理事業（R）	藤原　真里子

（MSW）は医療ソーシャルワーカー、（R）は臨時職員

2　平成 28 年度の業務実績

医事課は患者に良質な医療及びサービスを提供するための受付等の窓口事務と診療報酬の請求を、地域連携室は患者の紹介受診に係る連絡調整などの病診連携業務や医療に関する相談を主な業務としており、以下の 12 事業を所管している。

（１）中央病院窓口事業
（２）中央病院外国人患者対応事業
（３）中央病院診療報酬請求事業
（４）中央病院診療録管理事業
（５）中央病院医事統計資料作成管理事業
（６）中央病院地域医療連携事業
（７）中央病院医療福祉相談事業
（８）中央病院健康診断受付事業
（９）中央病院脳ドック受付事業
（10）中央病院患者相談窓口事業
（11）中央病院看護相談事業
（12）中央病院医師事務補助事業

教育・研修

医事課では、医療ソーシャルワーカー、診療情報管理士が、専門職としての質の向上を目指し、院外研修へ積極的に参加している。

医療ソーシャルワーカー研修

開催日	研　修　名	開催地
4/16-17	認定社会福祉士認証認定機構　スーパービジョン研修	名古屋
5/21	静岡県医療ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ協会　春季研修会	静岡市
6/24	静岡県社会福祉協議会主催　生活困窮者自立支援研究セミナー	静岡市
8/20	静岡県医療ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ協会　中堅者研修	静岡市
8/27	静岡県医療ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ協会　東部地区研究会	三島市
10/1	浴風会ケアスクール	東京都
12/11	ソーシャルワーク研究所シンポジュウム	東京都
2/12	静岡県ソーシャルワーク実践研究学会	静岡市
3/4-5	ソーシャルワーカースキルアップ研修	神戸市

診療情報管理士研修

開催日	研　修　名	開催地
7/30	クリニカルパス教育セミナー	東京都
8/4	院内がん登録修了者研修	東京都
9/3	DPC マネジメント研究会	東京都
9/10	DPC マネジメント教育研修会	東京都
10/13-14	診療情報管理学会学術大会	東京都
11/25	診療情報管理士生涯学習研修会	神奈川県
11/25-26	クリニカルパス学会学術大会	石川県
12/12	院内がん登録データ集計、分析研修	東京都
12/17	院内がん登録実務者研修会	静岡県
1/21	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都

3　来年度の課題

地域連携室においては、地域医療支援病院の平成 29 年度内の早期承認を目指し、地域の基幹病院として地域の医療機関との連携を更に推進し、地域医療の一層の充実を図る。また、地域がん診療病院として、がん診療体制及びがん相談支援体制のさらなる充実を図る。

診療情報担当においては、診療情報の質と精度の向上、高度な管理と活用により、良質な医療の提供及び病院経営の向上に寄与する。

（文責　森　育洋）

■医療安全対策室

1　スタッフ

役　職	氏　　名
室長兼副看護部長（専従リスクマネジャー） ※日本看護協会認定看護管理者	田中　稔
メンバー（兼務）	12 名

2　平成 28 年度の業務実績

1）インシデント・アクシデントレポートの集計、分析

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
報告件数	3,310	2,882	3,151

2）医療安全相談

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
相談数	0	1	0	3	0	1	0	0	0	1	0	0

3）医療安全研修

第１回「患者さんと共にすすめる医療安全」　３回開催　参加率 59.7%

第２回「深部静脈血栓症予防」　２回開催　医療従事者参加率 43.7%

4）医療安全関連講義

・看護部講義７回

・看護師実務者研修講義１回（市役所依頼）

・市立看護学校講義６回

5）医療安全情報

・院外からの医療安全情報を関係部署に配布し、情報の提供と周知を図った。

・院内医療安全情報「カタボン Hi の血管外漏出による組織損傷」を発行した。

・院内医療安全情報「滴数制御式輸液ポンプ使用の注意」で再喚起した。

6）巡回および再発防止策

・転倒転落防止対策として「みまもり食事テーブル」の購入および病棟浴室のシャワー介助用椅子を更新した。

・外来における夜間・休日の施錠の実態を調査し、確実な施錠対策を実施した。

7）医療安全活動（マニュアル改訂含む）

・酸素ボンベ保管場所の点検（医療ガス安全管理委員会協同）をした。

・「埋め込み型静脈ポートの適正使用」一部改訂（医療安全管理委員会）を提案した。

・「医療安全管理指針」「医療安全管理委員会要綱」「医療安全対策室運営要領」「医療事故調査委員会要綱」一部改訂（医療安全管理委員会）を提案した。

８）医療安全対策室たより発行（12 回）

・看護部の部署別種類別報告数を一覧表にし、コメントも付けて看護部リスクマネジメント担当委員会で配布した。

９）各委員会、各部署との調査・相談

・薬剤アレルギー判明時の患者への報告方法を依頼した。（医薬品安全管理責任者）

・スタットコールの適切な放送を調整した。（警備室・総務課・救急外来）

・注射伝票へフリーコメントが入力できるシステムを依頼した。（医薬品安全管理責任者）

３　来年度の課題

医療安全相談を患者･家族のみでなく職員からの相談にも応じ問題の軽減（解消）に努める。

医療安全研修に診療部の参加率向上を目指す。

（文責　田中　稔）

■感染対策室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
室長	後藤　博一（泌尿器科）	専従	増田　満伯（感染対策専従看護師）
メンバー	18 名（兼務）		

※所掌事務のほか、感染制御チーム（ICT）として機能する

2　平成 28 年度の取組実績

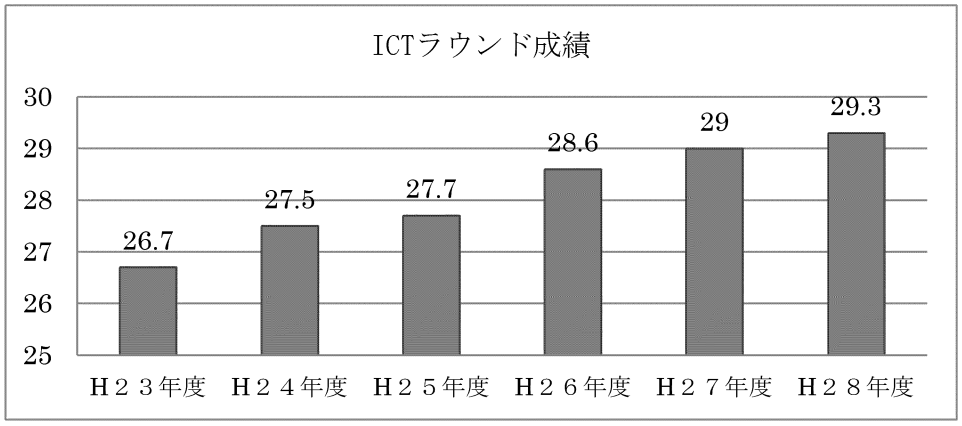
（1）ICT 定例会　12 回（毎月１回、第４水曜日）

（2）学会報告　第 32 回日本環境感染学会

NICU において遺伝子型が異なる３タイプの MRSA が同時期に発生、拡散した事例

（3）院内感染対策室（ICT）によるラウンドを実施

ICT ラウンドは毎週水曜日に 30 項目に対し評価した。適切な指導と職員一人ひとりが迅速な対応で改善策に取り組んだ結果、年間のラウンド平均点は 29.3 点となり昨年度より 0.3 点上昇した。その他にも検出菌（MRSA）ラウンド、耐性菌対策評価ラウンド、血流感染ラウンドを実施した。



（4）ICT 主催による職員対象感染対策研修会の開催

①内　　容：「血流感染から見る院内感染の制御」

開 催 日：平成 28 年８月 19 日（金）

平成 28 年８月 29 日（月）　※ビデオ上映

平成 28 年９月　２日（金）　※ビデオ上映

講　　師：京都大学医学部附属病院　髙倉　俊二

参加人数：350 人